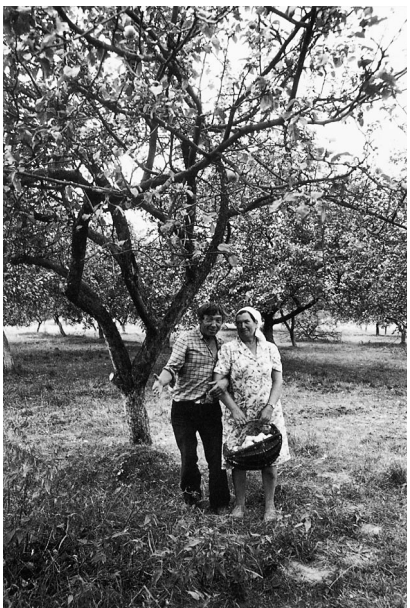




白夜の季節

スタディツアアのメンバーは

チェルノブイリの環境センター

血液病棟を訪問した

思いがけずに出会った 無心な瞳

日本という国さえも知らない幼子たち

入院は長期にわたり、

苦しい治療を繰り返しているはずなのに

紙芝居に一心に耳を傾け

ゲームにはしゃいで、笑い声がはじける

ぬけるような青空のあなたから

あの時の笑顔が蘇り、笑い声が聞こえてくる

特集 1

2004 年度理事会報告

JCF セミナー「イラクの医療と白血病」



5月8日の2004年度JCF理事会において今年度の事業への取り組みが決定した。ベラルーシ国立放射線医学人間環境センターへの白血病支援、ゴメリ州立病院付属産院への新生児支援、ミンスク小児血液がんセンターとの白血病支援カンファレンスを継続する。「10 ドリームズ9」で広く応援をつのります！

CONTENTS

特集 1 2004 年度理事会報告

2004 年度理事会報告	6
JCF セミナー「イラクの医療と白血病」	8
インフォメーション 映画「ヒバクシャ」	18

特集 2 JCF スタディツアー「白夜ツアー」

モスクワ便り	29
こんにちはベラルーシ <力丸邦子>	30

那珂町通信	34
連載随筆「ことばのみなもと」<宮尾彰>	36
ジーマのロシア小話	38
JCF セミナー「ベラルーシの食卓」	40
振替用紙のメッセージから	44
ありがとうございました	48
チェルノブイリ 10 ドリームズ9	50
出会い Встреча	52
萬粗忽堂本舗<村石保>	56
ニュースクリップ	58
Здравствуйте! (事務局広場)	60
本の紹介 Book review	64
事務局日誌	67

2004 年度
理事会報告

JCFの組織を見直しつつ、
イラクの子どもたちにも支援を

5月8日、長野県松本市中央公民館（Mウイング）にて、2004年度理事会を開催した。03年度の活動報告・決算報告・04年度活動計画・予算案について話し合い、承認された。

出席理事は12名、委任は4名、オブザーバー13名、事務局2名が参加した。

議事

1 03年度活動報告・決算報告

○チェルノブイリ医療支援については、3回の訪問団の派遣により、ゴメリ州立病院小児白血病治療事業が進められている。10月に、ミンスク国立小児血液がんセンターで日本から移送

したさい帯血によって、5歳の女兒のさい帯血移植を行ったが、残念なことに感染症で亡くなられたことを報告した。

○医療機器の供与が年度をまたいで、5月発送になっている経過と、「チェルノブイリ母子支援募金」からの寄付で、JCFの会計を通していないことを説明した。

○国内事業は、JCF講座「原発にたよらない暮らし」と「チェルノブイリの祈り」が盛況のうちに終わった。スタディーツアーや「グランド・ゼロ」の発行は会員と活動のパイプ役になっている。

○監査報告で、スタディーツアー経費の項目について検討が必要との指摘があった。

2 04年度事業計画・予算案

○国立放射線医学人間環境センター（ゴメリ）への白血病支援、ゴメリ州立病院付属産院への新生児支援、ミンスク小児血液がんセンターとの白血病支援カンファレンスを継続する。

○昨年実施されなかった児童健康診断を11月にチェルノブイリ地区病院・ゴメリ州立病院との協力のもとに行う。

○NPO法人格取得に向けて名称・ミッション（使命）を見直しながら、原案をつくる。案がまとまりしだい、理事会、総会と進める。

○1990年以来イラクの子どもたちに小児がん、白血病が増えている。湾岸戦争でアメリカが多量に使った劣化ウラン弾によるとも言われている。中東の子どもたちへの支援をしてきたNGO／日本国際ボランティアセンター

（JVC）から、JCFにイラクの子どもたちの白血病支援に協力してほしいとの依頼があった。チェルノブイリ被災地で現地医師をサポートしつつ治療成績を上げた、13年間のJCFの医療支援活動を聞き、相談したいのとのことだった。

湾岸戦争と経済制裁、そして昨年からのイラク攻撃と国内の治安の悪化により、医薬品が極度に不足している。抗生物質と抗がん剤の供給、血液の成分輸血ができれば、状況はかなり改善されていくのではないかとの話だった。急性リンパ性白血病の寛解率が10%という報告は、まるでJCFが13年前にチェルノブイリに関わり出した時と同様の治療成績である。

イラク支援については、チェルノブイリ支援以上に難しい条件がある。イラク国内の治安が安定するまでは入国するのは危険であること、小児がん・白血病と劣化ウラン弾との因果関係は

どうなのだろうか、新事業に着手する場合の事務局のマンパワーは大丈夫かとの意見が出された。JCFとしては、チェルノブイリへの関わりのように、さまざまな分野の専門家の協力を得ながら、放射線との因果関係の調査をしつつ、より有効な医療支援を組み立てたいと考えている。今年度は何ができるか、何が必要かの調査にまずは着手することになった。

JCFの活動が、転換期に入ったと思われる。ペラルーシでは医薬品や検査試薬など自国でまかなえるようになった部分もあるので、新しく着手する医師招聘、研修事業を含めたソフト支援にシフトしつつ、チェルノブイリ支援を継続する。

イラク支援と法人化は、理事会の検討を重ねつつ進めることとする。

2003年度決算報告

科目	今年度決算額
収入の部	
1.繰越金	4,476,206
2.会費	1,431,000
3.寄付金	8,491,093
4.助成金	10,340,760
5.事業部収入	7,279,522
6.雑収入	121,932
小計	32,140,513
支出の部	
1. C I S 事業費	6,089,029
2. 国内事業費	2,673,323
3. スタディーツアー	5,107,648
4. 人件費	8,515,350
5. 支払地代家賃	1,260,000
6. 水道光熱費	456,160
7. 修繕費	50,608
8. 賃貸料	166,627
9. 通信費	543,705
10. 備品費	165,931
11. 国内旅費交通費	727,552
12. パソコン保守	445,492
13. 事務用品費	154,202
14. 消耗品費	90,784
15. 荷造り運賃費	100,812
16. 交際接待費	41,605
18. 雑費	111,098
小計	26,699,926

収入決算総額 32,140,513
支出決算総額 26,699,926
繰越金 5,440,587

（会員の方は同封の詳細資料をご覧ください）

イラクの医療と白血病

林達雄



私がなぜイラクに行ったかという
と、どうもマスコミに書いているこ
とは嘘臭かったんですね。自分の目で
確かめない限り、真実はわからないん
じゃないかというなかで、私自身は出
かけていきました。そうすると、日本
で報道されていたことと現地の実態と
いうのは違うし、また現地の人達も、
悲惨なばかりでなく、生きる力を持つ
た人達だということもわかってきまし
た。

理事会に先立ち、JCFセミナーが開かれました。本橋成一監督と作家の池澤夏樹さんが製作したビデオ「DO YOU BOMB THEM?」上映の後、「イラクの医療と白血病」と題して、林達雄先生と佐藤真紀さんにお話していただきました。林達雄先生は元日本国際ボランティアセンター（JVC）代表、アフリカ日本協議会代表の医師で、鎌田理事長の長年のご友人でもあります。2月末から1週間、JVCスタッフの佐藤真紀さんたちと共に、イラクのバグダッドを訪れ、医師の目からイラクの医療事情を見て来られました。林先生と佐藤さんによるイラクのお話に、約60人余の参加者が熱心に耳を傾けていました。林先生のお話をテープ起こしたものを掲載させて頂きます。

私は日本国際ボランティアセンター
で13年ばかり活動してきました。その
後、5年前に私自身も病気になったん
ですね。直腸がんを患いまして、結構
厳しい、ぎりぎりの線での手術をして、
それまでは医者の目として病気を診て
きたんですけど、どうも生きるか死
ぬかだけが患者にとって辛いのではな
いのだということがわかりました。助
かったものの、生活をどうするか、自
分にとって問題でしたし、それよりも

もっと問題だったのが、そういう体力
の無い中で、いかに今までやってきた
仕事ができるようになるか、社会復帰
の面が一番深刻でした。私自身、鬱病
になった時期もありました。

その時に病氣仲間とたくさん出会
いました。その仲間というのは、エイズ
にかかっているんですけど、エイズ
は世界中で100人に1人という病氣
になつていて、がんなんかより若い人
が苦しんでおられる。

それまでは私は現地に行つて何かを
する、というタイプだったのですが、
病氣をして体力がなくなつたもので
すから、病氣を包む社会をなんとかし
ようという動きにシフトしていきまし
た。

■イラクの子どもたち

この10年というのは科学技術がすご
く発達して、今まで治らなかつた病氣
も治るようになりました。ところが薬

がある人には届くけれども、ある人に
は届かないという、貧困と格差があり
ます。

イラクについてですが、90年の湾岸
戦争以降、94年くらいから白血病、小
児の悪性疾患が増えていつているとい
う状況にあります。

サファアちゃんという子は、5年前
にやはり白血病で入院をしました。イ
ラクの場合、ずっと入院しているとい
うよりは、行ったり帰ってきたり、と
いうタイプの入院らしいです。彼女は
最近、白血病治療をしつかり受けるこ
とによって、いったん家に帰って、学
校に行き始めました。これはちょうど
佐藤君（JVCスタッフ）たちが絵を
描かせたんですけど、彼女はバスケッ
トボールをしている絵を描いていまし
た。やはり健康になりたいんだと思っ
ているんですね。

イラクの中で白血病治療等をしてる



のは4カ所で、そのうちの一つの病院
の、白血病治療をするユニットがあり
ます。この小児専門のマンスール病院
にアメリカの厚生省の役人達が急に訪
ねてきました。銃を持った護衛さんが
付いています。相当ものものしい感じ
で訪ねてきて、それに受け応えている
映像です。非常に大きな一団がやつて



も、ヨーロッパとアメリカは論争しますがそのことは日本には伝わらない。そして結果的に開発優先という、アメリカの主張が勝ってしまう。汚染による病気の危険と、感染による病気の危険の、2つの危険について述べました。

エイズは不治の病だと言われてきました。それと白血病も不治の病と言われてきた。ところが、エイズも95年以降、ある治療法を続けて、薬がしかるべきところに届けば助かることができ

ました。90年、それまでは社会主義の国がたくさんありました。政治的に社会主義がいいかどうかはわかりませんが、私たち医者の中からみますと、少なくとも医療は無料でした。誰でも医療が届く位置にいたわけです。ところが最近では医療も受益者負担です。患者サイドが自分でお金を払わなくてはいけない。特にエイズ治療、白血病治療など、ある程度高度な治療は、お金がない人は治療法ができていても受けるこ

■イラクを訪れて

湾岸戦争が起きた時に、ソ連が崩壊しました。90年、それまでは社会主義の国がたくさんありました。政治的に社会主義がいいかどうかはわかりませんが、私たち医者の中からみますと、少なくとも医療は無料でした。誰でも医療が届く位置にいたわけです。ところが最近では医療も受益者負担です。患者サイドが自分でお金を払わなくては

いけません。インドの世界社会フォーラムでのスローガン、「世界は売り物ではない」という話が先程でした。それは何を意味しているかと言いますと、あらゆる面の民営化です。今までは例えばアメリカとか、これからお話しするイラクは社会主義だったわけで、だれでもサービスが受けられる時代から、医療サービス・教育も、私立が増えていくし、受益者負担、民営化、企業が主体になっていく時代の中にあります。この10年、サービスが受けられる人と受けられない人の格差が広がってきた。そういう中で、イラクの問題を見ていきたいと思っています。

イラクの第一印象は、やけに汚い町だな、と思いました。ごみも多いですし、がれきもたくさんあって、いつのがれきだかわからない。JVCの佐藤さん達のお話によると、イラクは戦争

きました。

これは今年の2月にインドで行われた世界社会フォーラムの映像で、10万人くらい人が集まったのですが、その時のメインのスローガンの一つは、「インド・イラク・オキユペーション」で、イラクでの占領反対でした。占領を早く終わらせようというスローガンです。もう一つは「アワ・ワールド・イズ・ノット・フォア・セイル」、「世界は売り物ではない」というスローガン

■新しい危険

私も病気をして、それがきっかけになって、エイズということを通じて、今の世界の中の病気というものはどうなっているのか、もう一度考える機会を得ました。そうすると、過去10年を考えたときに、新しい病気のウェーブが来ていると思いました。



ひとつは病気のグローバル化。経済を中心に国が国境を越える。文明が動く人が動いて、人が動くと様々な感染症、エイズとかマラリア、SARS、狂牛病などが、一カ所で起きればどこでも起きています。感染症のリスクが高い時代になってきています。

もうひとつは新しい危険、汚染です。

環境ホルモン（内分泌攪乱物質）だとかダイオキシン、化学物質によるもの。またもうひとつは核、原子力による汚染。3つめは遺伝子によるもの。この3つのポリューション（汚染）が新しい危険です。

なぜそういうことが起きているか。10年前にブラジルのリオデジャネイロで環境サミットがありましたけれども、そのころから未知への危険は防ごうという動きがありました。これからは危険が起きてから防ぐのではなくて、予防してこうという動きです。

予防の考え方というのは、例えばヨーロッパでは非常に有権者の背景の中にあります。しかしもう一方で、この10年、湾岸戦争以降を考えてみますと、それまでG8（先進8カ国）から、最近ではG11になってきました。アメリカひとり勝ちになってきたんですね。例えば、その予防対策に関して、沖縄サミットの時にその問題が話されて

道援助は本当に役に立つのかどうか。役に立つにしても、どの程度役に立つのか。そういう見通しがない中で、大きなお金が流れている。私たちがみたいにはアフリカでエイズの支援をしてきたものにとっては、感染症をなんとかしようと言って動いていたお金が、今はぐるとイラクの方向に動いているように見えます。

イラク人による行政の復興を誰もが見ていません。イラクの人たちは、非常に現実的な側面があつて、イラク戦争の直後は、なんらか、アメリカによつて良くなるのでは、と思つていたと思います。ところがこの一年裏切られ続けてきている。僕が行った2月から3月にかけての時点では、誰に聞いても、早くアメリカ人に出ていって、らつて、イラク人による政府が欲しいと言っていました。

■経済制裁と戦争

私は今まで、アジアやアフリカ等で活躍していたんですけれど、中東は違ふと感じました。中東は石油もあるし、石油の財源が公共のサービス等にも回っていました。いわゆる低開発国ではない。湾岸戦争前のイラクは中東一のレベルを誇る医療で、非常に人材のレベルが高い。

戦争が一番恐ろしいと思いがちですが、必ずしもそうでもないんです。戦争が最も多くの人を殺しているとも限らないのです。これは1990年から2003年までの、湾岸戦争から今回の期間に至るまでの資料なのですが、経済制裁が非常に長い期間行われていました。日本も加盟している国連によつて、イラクに物資を出すのを差し控える期間が非常に長かったんですね。経済制裁によつて輸出も止まっている。91年を境に、物資の流れが止



まりました。イラクは食料自給率が非常に低くて、制裁によつて食べ物にすら困る。経済制裁によつて栄養状態が悪くなる、子供の死亡率も大人の死亡率も増えてくるんです。

97年を境に変わってきます。これではあまりにもひどいということで、イラクは石油があるから石油と交換という形で、食料を含めた最小限の必要生活物資に関しては輸入を認めるという



テロよりもテロを鎮圧する米軍の方が恐いと皆感じています。イラク人の虐待が、一般人の中でもNGOの中でも言われています。

実は米兵が一番おびえています。おびえている人達が銃を乱射したりする。イラク現地での正確な情報が手に入りにくくなっています。なぜそうなのかわからないのですが、米軍の占領下にあるがためなのかよくわかりません。一応アメリカがイラクを暫定的に統治しているのですが、今どうなつていて、これからどうなっていくのか、まったくわからない。

イラクに入ってくる外国人には三種類ありまして、一つは軍関係者、政府関係者。それからボランティア。もう一つはビジネススマンです。このビジネススマンが一番元氣です。イラクこそが今は儲け口だというんですね。石油もありますし、復興ビジネスもあります。実際紛争地に行ってみますと、そこで

も復興商売というのが、非常に盛んです。壊したからまた作り直す。それから民営化が大きいですね。先程世界は売り物ではないというキャッチフレーズがありましたけれども、世界は売り物ではない、環境、国は売り物ではないとも言っていますが、この10年、ビジネススマンにとつてもビジネスチャンスが世界規模で減ってきています。そういう中で政府が今までやってきた仕事を、企業がビジネスとしてやっていくのが今のビジネスの盛りです。そういう意味でイラクも今まで社会主義で、政府が行っていたサービスも、企業によつておそらく行われていくでしょう。

イラクは計画性のない援助、いわゆる人道援助が必要のない国です。一体イラクというのは全体としてどうなつていくのか、誰もわからない中で、その援助というのが組み立てられていきます。小泉さん達の言う、政府による人

ことになりました。国連のもとで行うということになりました。それにも関わらず、あまり改善されていませんが。いずれにしてもこの経済制裁というのが非常なダメージになっています。

優秀な人材がありながらも、必要な医薬品が滞滞してきたという現状が制裁によってもたらされています。

イラクの人達にとってこの一年はどうだったかと言うと、石油の輸出入に関して言えば、イラク戦争前まで回復してきているのに、なぜ医療や教育や生活が改善されないのか、という疑問があります。今後は、誰もが医療を受けられるのかそうではないのか、わからない。

ベルギーやドイツなどのイラク現地に入っているNGOに聞いてみると、衛生状況の悪さ、水の悪さなどからコレラが流行りそうだと言っています。そういうことを報告する一方で、イ



ラクはアジアやアフリカに比べると、我々のような人道支援、海外支援で応援する価値がそれほど高くない国であると言っています。

最大の問題は、ノンマネージメントの恐れです。本来ならば、日本だったら厚生省が中心になって医療の骨組みが出来ていくし、税金が医療方面に使われるときは保健省を中心にお金が行くところですが、イラクではそこどう使われているのか。イラクが戦後と言うのであれば、これから5年、10年、どういう計画の元に復興させてい

くかという話が出てくるはずなんですけど、その辺の計画がまったく見えてこない。こういうことを現地のNGOが指摘していました。

ドイツの団体の人は、イラクの民営化によって、医療が誰でも受けられるようにならないのではないかと、企業を中心に進んでいくことに問題があるのではないかと話していました。

■白血病について

2つの小児病院のお医者さんの話
NGO関係者の医者のもとにして
います。

イラクはもともとは人材が豊かな国です。中東一レベルが高い。

全国で4つの小児治療病院があり、セントラル小児科病院では、1850症例の実績を持っています。

ところが湾岸戦争後、国連決議による経済制裁で医薬品の供給が途絶え、

治療が困難になりました。

湾岸戦争から今に至るまでの間に、小児白血病における国際的な治療技術は急速に進歩し、白血病は不治の病から治る病へと変化しています。特にイラクで急増した急性リンパ性白血病は、現在の日本では8割の完全治癒率が報告されるまでに至っています。治るようになった病気の薬が、その病気が特に出てくる国で入手できないという現象が起きています。特にイラクでは経済制裁によって入手しにくいという現状があります。

なぜ、今日の話が白血病の話なのか。

湾岸戦争の時に劣化ウラン弾が大量に使われました。湾岸戦争とかイラク戦争がどういう戦争かと言いますと、アメリカがガラス張りの中で戦争しているようなものです。できるだけピンポイントで攻撃しなければならい。民間人なるべく巻き込まないよ

うにしないといけない。そういう意味で、周囲に爆発が広がらない、言い換えれば、近くの施設でも深く入っていく、浸透力のある兵器が必要なのです。戦車のような厚い装甲を深く貫かなくてはいけない兵器です。となると、兵器の先端に重いものをつければいいんじゃないかということになるんですね。

一番安上がりで、廃物利用、リサイクルできる、原子炉で使ったウランの残りを弾頭の部分につける、ということらしいんですね。核の兵器としてではなく、単に比重が重いからつける。

ところがそれがぶつかったときに、劣化ウランが小さな陶片のような粒になって、周囲に飛び散るのです。それが直接体内に取り込まれるか、大気中に滞在していて、体内に取り込まれることになる。それが、ある種の白血病の原因、あるいは湾岸戦争後症候群と言われるような、多くのアメリカ帰還

兵の奇病が発生したと言われていますけれど、そういったことの原因になっているのではないかとことです。

イラク国内の4つの小児病院から聞いたデータをもとに話します。

その1つを見れば、ちょうど1994年から徐々に患者数が上昇している。注意してみただけでなければいけないのは、90年代にイラクの中で白血病の治療技術がどんどん進んで、病院の受け入れ状態が良くなったから数が増えたのではないということです。ちょうどその時期は経済制裁下にあるので、白血病治療の受け入れが良くなったわけではないのです。それにも関わらず、数がそれ以前の何倍かに増えている。

例えば、セントラル小児科病院の医師は、「1994年を境に、それ以前と比べて、小児の悪性疾患・白血病の症例が約3倍に増えた。特に急性リ

ンパ性白血病のL2タイプの占める割合が5〜7%から30%に上昇した」と言っています。これ自身が被ばく性の白血病の増加を示唆しているかどうかはわからないですけど、いずれにしてもこの時期にこういった白血病が増えている。

また、米国のNGO、IMCのナスハット医師は、疫学者^{えきがく}なのですが、彼は「ヨルダン、イランなどの周辺諸国と比べて、イラクの悪性腫瘍・白血病の発生率は5倍から7倍程度高くなっている」と報告しています。

このイラク国内での比較、イラク以外の周辺諸国との比較によって、劣化ウラン弾との因果関係が示唆^{しき}される訳です。

因果関係がどこまで立証されるかわからないですけど、もしこの劣化ウラン弾が原因になって、ある種の白血病、小児悪性腫瘍が増えているとしたら、今回のイラク戦争後から3年4年

後、また増えるでしょう。1994年と同じようなブレイクが起きるかもしれない。

これに対してイラクの中でどういう対策がとれるか。80年代からある程度の白血病の治療技術を病院は持っている。或る程度の症例数をこなしている。医療に関する最新情報は、医者達のインターネット上の個人努力によって最新版のプロトコルを使っているらしいです。ただ、この白血病治療に必要な、抗生物質と抗がん剤と成分輸血、この3つの条件がそろえば、白血病の子供を治療できるかもしれない。これから3年後位に出て来るであろう患者さん達に、手が打てる状況を生み出せるかもしれない。

ところがイラクの医療というのが、全体として回復できるかどうか。できてもこういう専門分野に力点を置けるかどうか。例えばそれができたとしても、みんなが受けられる値段で治療ができ

るかどうか。イラク人による政府ができたとしても、今いるイラク人達だけの努力で迅速な対応ができるかという、それはかなり疑わしいですね。

イラクが注目をあびて、日本には他の国よりも多くのイラクに関する情報が入ってきています。

イラクの問題はイラクという国が当事者であるし、もう一方で、アメリカという国が当事者でもあります。

日本はイラクに対してもアメリカに対しても当事者であります。

いったい日本がやっていることに意味があるのでしょうか。それは誰もがクエスチョンマークをつけるころがあります。小泉さんは人道援助ということと言っているけれども、現実的にイラクの人達のニーズに応えるということに関して、自衛隊のやっていることが全く効果がないとは言いませんが、効率のいい、イラク全体を見渡し

た援助かという非常に疑わしい。イラクにとって何が必要かという根拠よりも、対アメリカの中で何が必要なのか、という根拠の中で動いている方が大きい。

企業は企業で、主に米国系企業が、儲け口だと言って入っているビジネスが、(もちろんビジネスも大事ですが)本当にその現地の人に役立っているのか。

もう一つのイラクに対する対応の仕方として、私たちのような対応が必要なのではないでしょうか。

■ 私たちも行動を起こそう

私自身はイラク問題に関しては、非常に苛立ちを感じているんですね。人質事件、自己責任論にしてもそうです。ボランティアであろうと、マスコミの人であろうと、現実のイラク、生活をしているイラクとして、見据えていく目を持っていないのではないし、そ

ういう人達がいなければ、日本は全くイラクを知る目を失ってしまうのではないのでしょうか。

日本政府は、自衛隊の派遣とはいえ、ある行動をしているんですね。我々も政府に対してこうすべきだと批判するだけじゃなくて、私達も役に立ちたい。できることなら、戦争で人を殺すんだったら、その分までもっと人を生かしたい。

この分野に関して言えば、日本という国は経験を持っているのではないのでしょうか。小児白血病の治療の分野において、この10年非常に技術が進んできましたし、そのネットワークも広い。そして患者の立場に立った医療もできてきている。広島・長崎を背景に持つ日本という国は、ヒバクシャに対する対応の経験値も高い。今のイラクで私たちが行動を起こすとすれば、この白血病の問題というのは相当しっかりやった方がいいのではないでしょう

か。

市民だけでなく、長野県、広島市行政などが一緒に組んで、人を生かすことができたらいいいのではないかと私は思います。



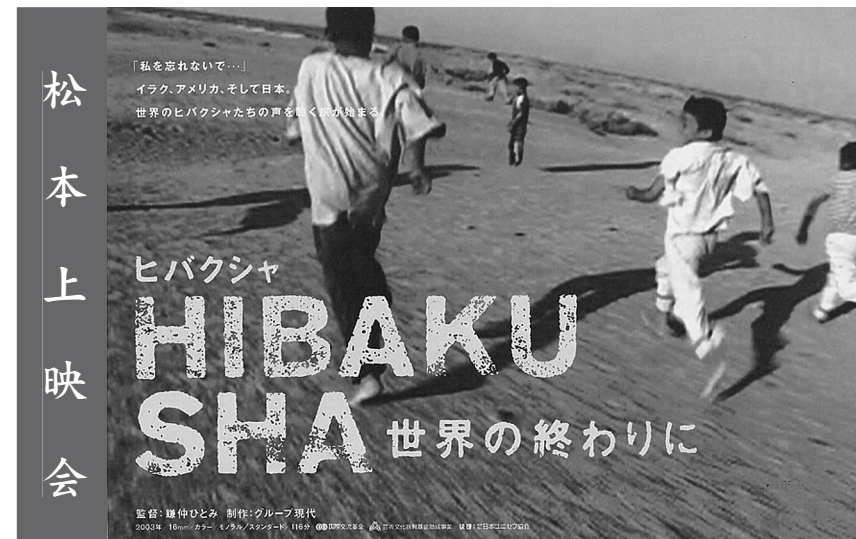
特集 2

JCFスタディツアー

白夜ツアー



5月28日～6月4日。夜行列車で16時間。ロシア・サンクトペテルブルグからベラルーシ・ゴメリまで強行軍のツアーだった。白夜の季節に、また新たな交流が生まれた。



長編ドキュメンタリー映画 「ヒバクシャ」

監督 鎌仲ひとみ

2003年制作 DV MASTER PRO 116分 カラー

日時 2004年9月5日(日)

① 10:00～12:00 「ヒバクシャ」上映

☆ 13:00～14:45 鎌仲ひとみ監督の講演会

② 15:00～17:00 「ヒバクシャ」上映

会場 松本市中央公民館 6Fホール

入場料 ・前売り券 1000円・当日券 1200円・学生 800円・中学生以下無料

「ヒバクシャ」上映プレイベント

★8月9日(月) 10:00～12:00 松本市中央公民館 (Mウイング) 3-2・工作室

「イラクの友だちに絵を描こう」 朗読 力丸邦子さん

夏休み子どもたち！信州からイラクへ。私たちの描いた絵を送り、交流しましょう。

絵は上映会当日、ホワイエホールに展示します。

★8月21日(土) 13:30～15:30 松本市中央公民館 (Mウイング) 3-2

「ヒバクシャのおもい！」 長野県原爆被害者の会会長 前座 良明さん

大陸での戦争体験、広島での被爆体験。

今、この世を生きるヒバクシャのおもいにふれよう！！

主催 「ヒバクシャ」松本上映実行委員会
問合せ先 TEL&Fax 0263-32-3307 (担当 松本)



◆ JCFスタディツアー
白夜ツアー旅日記 ◆

5月28日・白夜のサンクトペテルブルグ
モスクワでトランジット。夜10時20分サンクトペテルブルグに着いた。折しも白夜の季節、夜中だというのにまだ街は日暮れ前のように明るい。時差5時間を含めて長い長い一日だった。

5月29日・ピョートル宮殿
予定していたピョートル宮殿は、この日から噴水がオープンする。そのため途中の道路が大混雑になるのではないかと、旅行社の運転手が心配する。迷いながら宮殿の入場予約券を手に入れるまで、街をドライブしながら回る。この辺のロシア事情は今だによくわからない。しかし、ツアー参加の力丸さんのお知り合いでサンクト在住の大平玲子さんが案内役をかって出てくださいました。大平さんの丁寧な対応に一同安心しつつ古都を巡った。

ピョートル宮は人の山。昼食に、おいしいロシアスूप、サリヤンカを頂いていると火花がなつて、噴水のオープンを知らせた。

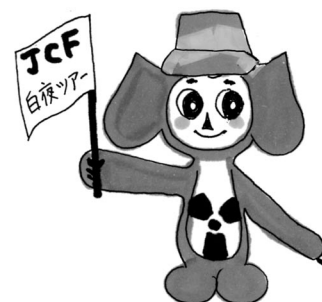
時々、雲が流れて雨を運んでくる。参ったのは、宮殿見学の時だった。順番待ちでじっと一時間。途中からポツポツと小雨が落ちてきた。何かの観光客は順番を無視して、どんどん入って行ってるように見えた。私たちの我慢も限度に達した頃、ようやく入場が許可された。中でも部屋ごとに待たされ、なんともはや、の一日だった。

JCFスタディツアーの一行10名は5月28日～6月4日、ロシアの大地を古都サンクトペテルブルグからベラルーシ、ゴメリへと一千キロの行程を夜行列車での移動という強行スケジュールで駆け抜けた。

ツアーの旅日記を、参加者のアンケートをまじえてお伝えします。

◆白夜ツアー行程表

月 日	行 程	宿 泊
5月28日	成田発 SU576 12:00 モスクワ着 17:00 モスクワ発 SU781 20:55 サンクト着 22:25	サンクト
5月29日	市内観光・ピョートル宮殿	サンクト
5月30日	エルミタージュ美術館 「ナジェージダ」写真展 夜行列車でゴメリへ	列車泊
5月31日	ゴメリ着 チェチェルスク地区病院 ブジシチェ村	ゴメリ
6月1日	ゴメリ環境センター 小児科病棟での交流 アナトーリーさんの別荘での野外パーティー 看護師さんグループはモスクワに向かい、帰路につく	ゴメリ
6月2日	アナトーリーさん宅 ゴメリ発 19:25	列車泊
6月3日	モスクワ着 09:05 モスクワ観光 モスクワ発 SU581 19:25	機内泊
6月4日	成田着 10:00	



◆参加者

大谷一義 山口美紀 金村栄子 畑真弓
上條恒彦 上條悦子 奥村和子 曾根光子
力丸邦子 神谷さだ子 (事務局)



5月30日・サンクト散策

サンクトに来たからには、なんと言ってもエルミタージュ美術館。前日を教訓に、開館2時間前から列に並んで順番待ちをする。ここでも大平さんの解説がとてもわかりやすかった。

午後3時から、JCF理事であり、写真家・映画監督の本橋成一さんの写真展「ナジェージダ」のオープニングに参加した。ツアーに参加された上條恒彦さんが「からたちの花」、イラク戦争反対を唱えながら歌ってくださった「イマジン」は、人々の胸に深くしみいった。

★「無限抱擁」、「ナージャの村」、「アレクセイと泉」、私の手元にあって大切にしている三部作の中から殊に印象深い作品の数々に会場で出会え、改めて心深く揺すぶられました。モスクワ空港で何かと教えていただいた杉野ゆり先生がご来場下さり、時折めがねを外して、ハンカチをお顔に当てておられるのが、誠に印象的でおともする私も万感迫るおもいがいたしました。

セレモニーでの上條さんの歌。しっとりとした「からたちの花」のあと、メッセージを込めて歌われた「イマジン」はとても素晴らしく最大限の共感を込めてじっくり聞き入りました。胸中唱和しつつ。松本・佐久・長野に続き4度目となる「アレクセイと泉」のなんとなくしかかったこと。この写真展はきつとロシアの人々に大きな感動となることでしょう。

(奥村和子)

5月31日・ベラルーシ到着

夜行列車にゆられて16時間、ベラルーシのゴメリに到着した。JCFが支援を始めた原点、チェエルスク地区病院に行った。コルサック院長の説明を聞いてから、小児科と検査室を案内していただいた。病院に入ると、駒ヶ根病院から参加された4人の看護師さんの対応が俄然変わってくる。検査の設備や小児科の看護体制を質問しながら、見て回った。

★地区病院の環境はひどいものだった。ここは本当に総合病院？と疑ってしまった。でも、この地区の人々はここが頼りなんです。言葉になりません。環境センターはとにかく設備はすごいことがわかった。そして技術も確かなもの。医薬品不足が問題なことも初めて知った。日本ではあり得ないことだと思った。日本を基準に考えてしまう自分をふりかえる良い機会になった。

(畑真弓)

★地区病院は暗い感じで、設備も不足していると思った。木のドア、暗い廊下が印象的だった。JCFの協力でいろいろな機械はそろったと聞いたが、それを扱う人材不足。ナースの不足が問題だと思っただ。なぜナースの地位が低いのかわからない。言葉が通じて、いろいろな面で余裕があり、許されるなら自分はナースとして働いてみたいと思った。小児科で乳児を抱き上げた時ハルン(尿)のにおいがしてなんだかとても切なくなった。

(山口美紀)



★グランドゼロの記事や菅谷先生の本などを通じて頭の中では知っていたが、現場で病院を見学させていただき、先生方の説明を聞くことによって、JCFの継続する医療協力が具体的にたいへん役立ち、頼りにされていることを実感した。

地区病院は廊下が暗くて冷たい印象を受けた。見学した小児科の病棟や産婦人科の外来では、水槽や植物を置いたり、漫画や写真を飾って親しみやすく工夫されていた。医療施設は迅速で適切な診断をするためにはあまりにも不足していたが、説明してくれた医師はみな優しい目をしていました。

（曾根光子）

★病院を訪問し、以前よりもJCFを応援してゆく気持ちがある具体的なものになりました。罪のない子どもたちの明るい未来を願わずにいられました。

（上條悦子）

★設備は日本と比べるとずいぶん少なく遅れていると思う。日本は物がありすぎるのかもしれない。本当に必要なものは何かを考えるべきなのかもしれない。

でも、医師・看護師はよその国から来ている私たちを快く受け入れてくれたように思う。日本の医師のように、冷たくいばっている姿は見られなかった。

（金村栄子）

ブジシエ村で

「アレクセイと泉」の舞台となったブジシエ村。泉の水はベラルーシブルーの空を映していた。アレクセイの家では、イワンじいさん、ニーナおばあちゃん、アレクセイが待つていてくれた。お米のミルク粥、手作りピクルス、次から次へとテーブルに並べてくれる。素朴な心からのおもてなしに感激した。

★村の訪問では、人間が本来持っているもてなしの基本を学んだような気がした。私は、物質的な豊かさに埋没している自分がこのツアーを通して何を学ぶことができるかを考えていました。高度成長期以来、アメリカ流の大量生産・大量消費の考え方に押されて日本人本来の持つ、「もったいない」という概念が忘れられ、修理または直して使うことを放棄し、捨ててしまい、新たなものを購入するということが、物の持つ価値観を見失っていました。

（大谷一義）

★緑が豊かで自然がいっぱいあるこの村を「埋葬の村」にしてしまう原子力発電所の恐ろしさを感じた。文化的でない不便な村なのに、そこで生活している人たちは明るく、親切で精一杯私たちをもてなしてくれたこと。初めての外国旅行で不安だらけの私はとてもほっとした、穏やかな気持ちにさせてもらいました。生活していくのに大変だと思うのに、その大変さを感じさせなく生きる人たちがすごいと思いました。

（金村栄子）



アナトリーさんのダーチャ
午後は、いつもお世話になっているアナトリーさんのダーチャ(別荘)に行った。アナトリーさんご夫妻の人柄による、何ともいえないゆつたりとした気分の、豪快なシャシリック(焼き肉)パーティだった。ここでも串刺しのジョーこと上條さん、大谷さんの男性陣が活躍してくださった。

★高い青空、ひんやりした空気、ライラックの香りを乗せた風、木漏れ日、イチゴ畑、コウノトリの子育て、ミミズクの子ども、満開のこでまりに似た花、ソージ川、イワツバメの群れ、黒い羽のチョウトンボ、牛を追う人々、おいしい料理の数々、おいしいワイン、楽しそうに歌うナターシャさん、道程の下見を二回もしてくれたアナトリーさん。最高でした。たくさんの蚊とトイレはエピソードに過ぎません。
(曾根光子)

★照り降りさだまらず、のんびりしているかと思えば、ピョートル宮の待ち時間などのような測りがたい事態も：というサンクトペテルブルグが、遠い夢のような命の洗濯をさせていたいたのが、アナトリーさん方での時間です。働き者のご夫妻、歌の好きなナターシャさん、自給自足、ゴミを出さない生活方式など素朴なくらしの中に知恵が生きています。
(奥村和子)



6月1日・環境センター
放射線医学人間環境センターの小児血液病棟を訪問。イーゴリ先生がJCFとの協力について、イリーナ先生が病棟全体について説明してくださった。

小児血液病棟には、約30人の子どもたちが入院していた。プレイルームに集まって、力丸邦子さんが日本から持参した「おおきなかぶ」の紙芝居が始まった。見入る子どもたちは真剣そのもの。その後のゲームでは看護師さんたちも参加して盛り上がった。

★医療従事者に女性が多いそう多いことにまず注目いたしました。チエチエルスク地区病院、決して整っているとは見えない設備・施設の中で、聖職者の様な穏やかさの裡にも毅然たる口調で医療の現状を語ってくださった院長先生。検査室を案内してくださったオリガ先生。翌日お訪ねした環境センターで見学させていただいた遠隔医療システムのお部屋はJCFと現地医療従事者との篤い信頼関係をまさに象徴する設備と存じました。日本の先進医療を兄事しつ、感謝しつつ、なお施設の優劣を問わず誇り高く職務を全うされていると感じました。
(奥村 和子)

モスクワ便り



今、ポルトガルでユーロ 2004（サッカーヨーロッパ選手権）が開かれています。モスクワのほとんどの男性たちは、夕方テレビを見ています。9 時頃、モスクワの通りに男性はいません。

もし、男性グループが歩いているとすると、彼らは一番近いビールバーへ試合を見に行こうとしているところです。

サッカー、それは病気のようなもの、感染します。サッカーを好きでない人々にさえも誰がプレーしているか、選手権を見ます。私も、時々息子に質問します。＜誰がプレーしているの？＞私には誰でも同じことなのですが。厳密に言えば、息子にとっても、誰が出ていても同じなんです。

サッカーは人々を一つにします。知らない人同士が得点についてお互いに聞いています。小さなホテルでガードマンがテレビを見ていました。旅行者がホテルにやってきました。フロントでチェックインする前にガードマンに聞きます＜得点は？＞

サッカーに国境はありません。少し前にギリシアのホテルで、様々な国から来た人たちがホールでサッカーの試合を見ていました。それぞれが自分のチームにく冒されていました。だけど誰もものしりあいませんでした。

しかしなんと言っても、サッカー選手権は家族生活に影響します。テレビ番組の前に男性にどんなことでも頼むことができます。すべて時間内にやってしまうでしょう。つまり番組の始まる前に。

イリーナ・ニコラエバ（モスクワ事務局）



6月2日・モスクワへ

前夜、看護師さんチームを一日早く送って、残った6人は、ダーチャでゆっくり過ごすことができた。

今年は雪解け水が多くて、蚊がひどい。だけど、青くて広い空とゆつたりと流れるソージ川の河畔をのんびり散歩する時間がもてたことは貴重だった。アナトリーさんご夫妻に感謝です。

夜行列車までの時間は、ゴメリスバルツク公園を散歩した。ちょうど公園内の教会で礼拝が行われており、澄んだ女性たちの賛美歌の音に心が洗われるかのように感じた。

★このスタディツアーに期待していたことは、とにかく、現地に立つてみることで、それが念願でした。しかし、チェチェルスク地区病院をお訪ねしたとたん、私はここにいていいのだろうかといういたたまれなさに苛まれ始めました。その思いが環境センターの子どもたちに出会うに及んでピークになり、つらくてたまりませんでした。何もできない私自身。にも拘わらず、JCFの長年にわたる支援活動の実績の上に乘せていただいて、今この地にいます。しかも具体的に何ができるといってもない。見聞する事象を胸にたたみ込んでゆくしかない、という無力感。救いはサマシヨールの人々の村。そしてアナトリーさんのダーチャ。そこに脈々と感じられる「人のこころ」「いのちのいとなみ」であつたと振り返っています。

（奥村 和子）

練習してこの場に臨んだのですが、イリーナさんに「わからなーい」と言われてしまい、それならばと日本語でリズムをとって『ライオンなんて怖くない』と続けます。子どもたちはまったく同じリズムをとって日本語で遊びに入ってきました。しばしライオンに追われる鬼ごっこが続きました。この笑い顔、この笑い声が絶えることなく続きますように。そして次に訪れる機会があるならば、もっと時間をかけて向かい合い、この子どもたちが、自分にもできた！できるんだ！とワクワクしたり達成感を十分に味わえるプログラムを持って、この子どもたちの為だけにゴメリを訪れたいと思います。

子どもたちとの交流の後、現地の医師の案内でJCFから贈られた医療機器、通信機器を見せていた、だきフル活動していることにうれしくなりました。この日、私の知人、ニーナさん（ゴメリの人）と一緒にこの医師の話聞き、大変驚き、且つ喜び、神谷さんにお礼の言葉を伝えていました。このように日本からの支援をベラルーシの人たちにこそ広く知っていた、たくさん大事なのです。その後このニーナさんは行く先々でお仲間に日本の支援のことを手振りよろしく話していました。今回の旅で初めから私には目的がありました——日頃交流を続けているゴメリの人たちを訪ねたいという——。「わがままを言うてすみませんが、ゴメリの病院訪問以外の時間は単独行動をさせてください」と申し出た私に「うん、わがまま。すぐわがまま」と神谷さんはきつぱりと答えました。がその声は笑いを含んだ温かいものでした。環境センターから出てニーナさんと一緒にゴメリに戻った私は第2の目的に向かって歩き出しました。〈私の体にはビタミンが必要なのに果物は高くて買えない〉という手紙は時々届きます。



カ丸さんの紙芝居に目を輝かせて聞き入る子どもたち



子どもたちは看護師さんの「大きなかぶ」を「うんとこしょ」と引き抜こうと……

これにちは、 ベラルーシ

カ丸 邦子

その日のゴメリは空気はひいやりとしていて、空は高く高くどこまでもやさしい青色が広がっていました。環境センターを訪ねると、小児科病棟プレイルームにはすでに小さいひとから13才までの子どもたち23人がわたしたちを待っていてくれました。この日の出し物は、おなじみのロシア民話《おおきなかぶ》。うんとこしょ、どっこいしょ……この日本流の言い方が気に入ったのか、そこに来ると子どもたちは笑いあっていました。喜んでいる今のうちに、と、即《おおきなかぶ》の劇遊びに転じる。駒ヶ根病院の看護師さん3人に大きなかぶになっていたいで、子どもたちがおはなしの通り、次々とかぶを引き抜きにかかります。かぶが抜けて笑い声が続く中で『ライオン狩りに行こう！』と誘います。『Лайон Ba』これはJCFロシア語講座のガニ先生に教えていただいた、くり返し

今回は果物を届けたいと思ってゴメリに行きましたから、バナナ、いちじく、青りんご、オレンジ、レモン、くるみ等を買って両手に抱えて家を訪ねました。訪ねた先が住宅地だったり、周囲に木や町の建物がある中で暮らしている人たちは、困難であろうとは思っても、何かほっとしましたが、迎りに



ゴメリ駅 カ丸さんを見送りに…

というのでしょうか。どこに希望が持てると思うのでしょうか、この現状を見て、その言葉は口にできませんでした。『事故から18年。人々は充分に苦しんできました。もう解き放してあげて下さい』と清らかな歌声が静かに流れる教会で、そう神様にお頼みしてゴメリを後にしました。

ゴメリの人たちから日本のみなさんへ伝えてくださいと言葉を預かってきました。ここにお伝えして、旅の報告といたします。

『日本のみなさん、私たちのことを忘れないでいてくれてありがとうございます。心から感謝します』



何も無い、ただ白い砂地ばかりが広がる空っぽの中に白いコンクリートの建物がいくつもあるだけの荒涼とした所に住んでいる人々を訪ねた時「エレベーターも動かない10階12階の高いところに追いやられるようにして暮らしているのか」とその淋しい空気に胸が塞がれる思いがしました。点々と生えている小さな雑草が風に吹かれて折れるように体を曲げ、また静かに体を起こしていたようですが、そこに住む人々を象徴しているようで何とも淋しく思わず涙がこぼれました。

あちこち廻って遅い時間にホテル

に帰った私をナターシャとママがロビーで待つていてくれました。着いたセーターよりも白い顔をしたナターシャは「これから夜汽車でミンスクの病院に行く」と言って、すーっと寄って来ました。抱きとめて、その背中の薄さにびっくりしました。今度は20日間ぐらいの入院だと言って声を殺して泣いているのが、その背中から伝わってきました。『この娘は怖いんだ。怖がつている』そう思いました。傍のママも真つ赤な目をして見ていました。もう何回目の入院でしょうか。かける言葉も見つからない私は、氣をつけた。とだけ。

ナターシャ親子を見送って部屋に戻った時、ドアがノックされ出てみると金髪を刈り上げた体格のいい女性が立っていました。「クニコサン?」はい。あなたのお名前は? 彼女は目尻をぐっと下げて大きく笑みをもって「ユーラのママです」。まあ、ドウ

シャさん? 初めまして。『私たちは初めて会いましたが、もう40通もの手紙で話をしてきています。すぐに打ちとけました。』ユーラが外出できるなら当然一緒に来たのだけれど、彼は今ゴメリ州立病院で放射線治療を受けている。今あなたからユーラに電話してやって』というので電話しました。短い会話でしたがユーラは「ありがとう」をくり返していました。その声は疲れ切っているようで、つらい治療であることが察せられます。彼もまた何回目の放射線治療でしょうか。『あなたが励ましてくれたから私たちは頑張つてこれた』ユーラママはそう言って、大きな手で私の両手を握った。その手の上にママの涙がおちました。

私は今回、ゴメリで会った人たちに「希望を持つてね」と言葉をかけようとしてロシア語でその言葉を何度も練習して行きましたが、誰にもその言葉はかけられませんでした。何に希望を持て

医療機器 名古屋港出港

ゴメリ州立病院付属産院への支援医療機器、超音波診断装置・血液分析器・その他医療資材、外科手術器具などが6月19日、名古屋港を出航した。約1ヶ月かかり、ドイツのハンブルグ港に着く予定。その後、トラックでベラルーシまで輸送される。

秋には、機器を使つての診断の指導、設置のために、メディカル・エンジニアと専門医が渡航する予定である。





那珂町通信

国際平和巡礼を迎えて

笹田 海

(ナージャの輪)

4月11日、先住民族（アボリジニ）を中心にオーストラリアから国際平和巡礼の一行が、ここ東海村へやってきました（23名）。来日初日に、JCO事故の現地に行ってきたという希望、たと主催者の方から聞かされたときは、あの事故の影響の大きさを、再確認させられました。悲しいものです。わたしも応援という形で、できること…食事係というかたちで、参加させていただきました。

当日は、大泉工業に予定より多くの方が参加して、盛大に催されました。最後の夕食時に、皆さんに紹介していただきました。そのためか、その後の交流会の時には、とても暖かく迎えていただけました。（食事担当のおかげ



かも…）
英語ができないわたしが、お話をしたくなり、何度か通訳の人にお願ひしていましたが、そのうち、身振り手振り…本当にアテ語の単語と、それに近い雰囲気であってほしいと言わんばかりの、単語を並べての会話を始めていました。相手も、一生懸命に考えてくれて、クイズをしている感覚での会話は楽しかった。
ナタリーとは、三人ほど介した後には会いました。かわいくて、目がとても印象的な娘さんで、ダンスのインストラクターを目指している、わたしの子供くらいの年齢でした。

彼女がわたしに、手を合わせて涙しながら、ごめんなさいと言うのです。わけは、ウラン鉱をナタリーの故郷から運んだために、JCO事故が起きてしまったということです。わたしにはそんな考えは全く信じられませんでした。

書かれているのを見ると、とってもすつごく安心できるのです。



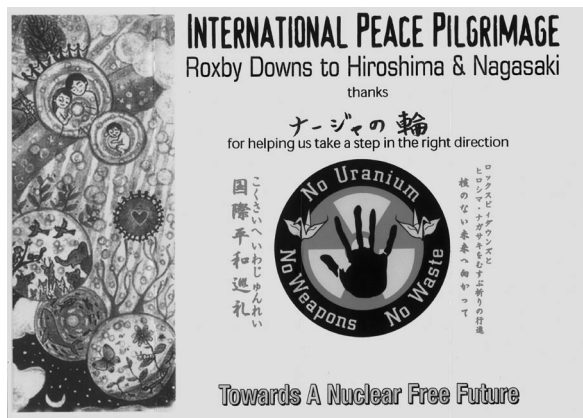
こんなナタリーのような考えの人間ばかりなら、戦争は起きようはずはないし、環境破壊も無い、とても住みよい地球になるのではないかと、思わされて別れました。

ほんの1時間の交流会でしたが、参加してよかったと思いました。わたしもナタリーのような、美しい心を持つ人になりたい、子供たちにもそう育ってほしいと、母として思いました。とても忘れることのできない、すてきな人達と会うことができ、感謝でいっぱいです。

た。反対に、日本人が安い賃金で現地の人を働かせ、被曝させ病気になるって、何の保証もしていないであろうに、怒りを向けるのならわかるけど、謝られてしまつて、わたしはなんて言つてよいのか、とまどつてしまひ返す言葉も分からなくなつてしまひました。

さて、今年のJCO事故健康診断も無事に終わることができました。今年は、昨年と同じくらいの受診者でした。（304名）ただ、中学生の数が少し増えたと聞いて、親は子供を心配しているんだと思いました。

5月下旬に検診の結果が届きました。毎年のことですが、子供の所見欄に「異常ありませんでした」の文字が



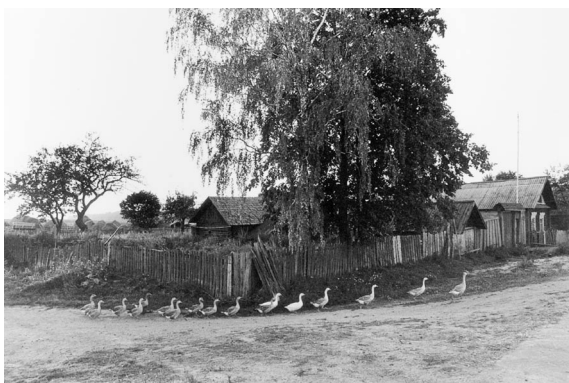
ことばのみなもと

宮尾 彰

No.16

ことばは元来かわりと共に在る。

押田成人



写真提供 本橋成一

ロシアにワシーリー・ローザノフ（一八五六—一九一九）という作家がいました。日本では、代表作であるドストエフスキー作品の評論が翻訳されたのみで、彼が晩年に残した他に類を見ない独自の作品群は未だ紹介されていません。自らの言葉を活字にして発表する作家というなりにわいに身を置きながらも、彼には活字に対する根強い嫌悪感と不信感がありました。自分の言葉が活字となつて印刷された瞬間、書き手の魂が、顔や性格がはぎ取られてよそよそしい何ものかに変貌してしまう。あるいは「言葉の温度が下がってしまった」と彼は書きます。彼は手書きの原稿の内にか作家の「私」を認めませんでした。

奇妙なことにこうしたいわば活字を否定する思想を他でもない活字そのものによって表現するのが彼の仕事でした。興味深いのは、その具体的方法です。

彼は、多種多様な印刷上の趣向をこらす。彼は括弧（かっこ）を愛用する。…やイタリックや、小型の頭文字やをしきりに利用し、果ては文法に反してコンマの位置をわざと転倒したりする。

（神西清『肉体の落葉』／ローザノフに関する覚書の序説より）

ローザノフは「会話の魅力、肉声の美」あるいは「抑揚の自在な変化、微妙な間合いの呼吸」を伝える天才でした。原語で彼の文章を読むことは、その下に温かい血液の流れる人間の皮膚に触れる経験に似ています。「私の作品は私の精液で書かれている」という突飛な発言にも、猥雑な意味は含まれません。

あたかも冷凍処理を加えられたような、冷え切った「ことば」が一人歩きを始めたようです。気まぐれな指先の動きがそのまま液晶画面に移され、保存され、瞬時にして書き手の労力も介さずに転送される。受け手は、相手の内面のどんな深さから湧き出したのかもつかない知れぬまま、ぶしつけに画面に映し出された記号の羅列を眺める…。

運ばれた言葉と、届かずに残された「ことば」。情報と肉声。ローザノフがかつて最も恐れたことですが、今日私たちの言葉は引き裂かれています。

十一歳の少女は、言葉の源に突き当たるような経験が欲しかったのでしょうか。凶器へと伸びてしまったその手に、包ませてあげたかったものがあります。

それは、私たちにかかわりのすがたを教えてくれる実体としてのことばです。

貧しき者の欠け茶碗の中には、活きた人がいる。これを作った人と、これを用いる人とが対話している。欠け茶碗は物でなくなる。これは使つて茶を飲む道具でなくて、茶を飲ませてくれる人である。生きたものの世界がここに開けて行く。

（鈴木大拙）



写真提供 本橋成一

ジーマの

ロシア話

◆ロシアでは、健康状態の指標は一つだけ。

それは、「アルコールを飲める」か、「アルコールを飲めない」か。

◆「あなたはどのように指輪を違う指にかけているの？」

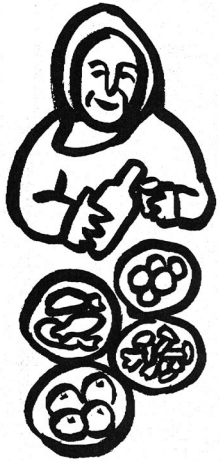
「私は違う人と結婚したからです。」

◆2人の女友達が会う

「あなたは極端な近視ですが、お婿さんと会うとき、何でメガネを外すのか？」

「まずは、メガネ無しの姿では私はもっときれいだ。次に、メガネ無しでは、婿はもっとハンサムだ。」

◆若い男子は女子に、



「あなたをご自宅まで送迎してはよろしいでしょうか。」
「それはよく分かっています。最初は『家まで送迎してよろしいのか』次に『家に入ってよろしいのか』、次に『コーヒーをご一緒に飲んでもよろしいのか』」
「違う！違う！違う！私はコーヒーは飲まないよ！私は直ぐでもシャワーとベッドでいいよ！」

◆婦長さんは医学学校の若くてかわいい女子卒業生に、病院の職場を案内している。

「この階では男の患者たちはあなたたちにとって、一番大きい危険性を晒している。

なぜか、あのやつらは殆ど健康だから」

——ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート——



АНЕКДОТ



◆В России один показатель здоровья: можно пить и нельзя пить.

◆-Почему ты носишь обручальное кольцо не на том пальце?

-А я вышла замуж не за того человека.

◆-Послушай, подружка, ты же очень близорукая, почему же ты всегда снимаешь очки, когда приходит твой жених?

-Ну, во-первых, я гораздо красивее без очков, а во-вторых, мой жених гораздо красивее, когда я без очков...

◆Парень подходит к девушке и говорит:

-Разрешите мне Вас до дома проводить?!

-Знаю я ваше "Разрешите"!!! Сначала до дому, потом, давайте в квартиру зайдём, потом чашечку кофе...

-Не! Не! Не! Я кофе не пью! Я сразу в души в постель!!!

◆Главная медсестра сопровождала группу молоденьких выпускниц медучилища, знакомя их с больницей:

-А вот больные на этом этаже представляют для вас наибольшую опасность.

Тут мужики уже почти здоровы...



参加者の質問に丁寧に答えるアーリア・シェフ

でも、ロシア人である私に「ロシアの料理ってどういう料理？」とか「ロシアの代表的な料理は何なのか」などの質問をよくしてもらいます。その答えは「ボルシチ、ペリメニ、オリビエサラダとピロシキ」はもち

こんにちは。アーリアと申します。去年の10月にロシアから参りました。もう七ヶ月間ぐらい日本にいますが、本当に日本の生活が好きになりました。特に和食が好きです。日本人といろいろなことについて話しながら、私は納豆とかお握りが好きと言ったら、相手をビックリさせます。実は、向こうで、カムチャツカでただ一つの和食のレストランでバイトしていて、日本食を味わうことができました。日本に来て、友達はいろいろ美味しいお店へ私を連れて行って、今まで日本の料理の美味しさを知らなかったという感じです。



スライドを使ってベラルーシ紹介をするアレクサンダー

で、その経験を実現させるしかなかったんです。でも、和食と違って、ロシアの料理は油っぽいので、最初、日本人の口に合うかどうかちょっと心配していました。お正月の時に、オリビエサラダ、ピロシキなどを作って、日本人の友達に食べさせて、意外なことに「凄く美味しい！」と言われていて、私は本当にほっとしました。今年の4月の24日、JCFの神谷事務局長の招待で「ベラルーシの食卓」と題したイベントに参加することができ

ろんです。本当にいうと私は料理あまり上手ではありません。今までいつもお母さんに料理をしていただいていたので、私は台所でその作り方を見ていて、お母さんを手伝っていて、何となくいろいろ料理の作り方を覚えておきました。だから、日本に

ベラルーシの食卓



アーリアは包丁さばきもなかなか見事

チエルノブイリ原子力発電所が大爆発事故を起こした4月26日のメモリアル・デーに、JCFは支援活動から学んだことを伝える、第18回JCFセミナー「ベラルーシの食卓」を開催しました。

4月24日（土）松本中央公民館（Mウィング）で信州大学留学生のアーリア・アレクサンダー、オレーシヤ・フラパターヤさんによる料理、アレクサンダー・フェダラウィチエス、ガニ・タスマガンベトフさんによるベラルーシの紹介、そして力丸那子さんの朗読と現地の子どもたちとの交流のお話を聞きました。Mウィングには、準備した「食卓」に座りきれないほどたくさんの方が集まりました。

アーリアとオレーシヤの指導で作ったお料理は「とても美味しい、是非、家でも作ってみます」と大好評、お鍋はみんな空っぽになりました。

アレクサンダーはスライドを使い、ベラルーシの紹介をしました。美しいベラルーシの自然や民族衣装の写真に、みんなうっとり。ベラルーシを何度も訪れ、現地の子どもたちと文通を続けている力丸さんのお話しも、とても感動的でした。

会の準備から活躍したアーリアに、この日の様子を伝えて頂きましょう。（日本語の記事をメールで送ってくれました！）

ベラルーシの食卓

オリビエサラダ

<材料>

鶏肉またはブロックのハム（200 g）・ジャガイモ（3個）・卵（2個）

・ピクルス（2個）・にんじん（1本）・タマネギ（1個）

・グリーンピース（適当な分量）・マヨネーズ

<作り方>

1. ジャガイモ・卵・にんじんを茹でる。

オリビエサラダはヨールカ祭（新年のパーティ）やお祭り、誕生日などに作ります。大勢の人が集まり、慌ただしいからでしょうか、ジャガイモなどは前日に茹でておくそうです。

2. 鶏肉を茹でて、冷まし、小さなサイコロ状に切る。

3. ジャガイモ・にんじん・ゆで卵を同じサイズの小さなサイコロ状に切る。

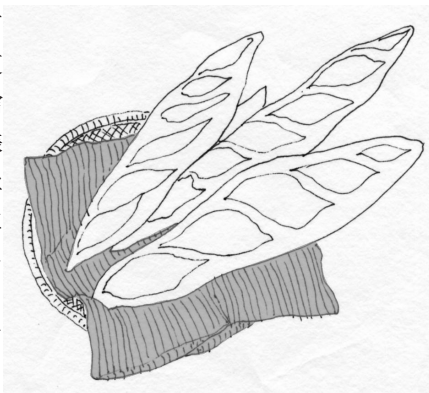
4. タマネギ・ピクルスを同様に切る。

5. 2・3・4の材料を全部一緒にボールに入れ、グリーンピースを入れる。

6. 塩・コショウを適宜にいれ、マヨネーズであえる。

日本で私たちもふつうに作るポテトサラダと思いましたが、ピクルスを入れることで、独特の食感がです。

オリビエというフランス人の名前が付いたサラダです。19世紀モスクワでオリビエさんが経営していたフランス料理店のメニューに豪華なオリビエサラダがあったそうです。20世紀になってレストランのなじみの客から作り方が復元されたという歴史があります。えぞ雷鳥の肉やキャビアを使った宮廷料理の様なオリビエサラダも、食材が手に入らなかったソビエト時代を経て、一般市民にも人気のあるロシアサラダとして定着したようです。ピクルスと、なるべくオイルカットのさっぱりマヨネーズでロシアサラダを試してみてください。



理を作っていました。食べ終わってから、みなさんは一人づつ御印象を述べて下さいました。

私はその言葉を聞いて、感動しました。「ロシアの料理は本当に美味しい」とか「オリビエサラダはとても気に入って、家でも作ってみたい」などを話して下さいました。みんなは満足していたから、私も嬉しかったです。料理というのは、食べ物だけではなくて、その国の料理に通じて人々の習慣、文化などを理解できるのは大事だと思います。最

ました。オレーシャ・フラパータヤ（一緒に日本で勉強している留学生）と一緒にボルシチとオリビエサラダという料理をみなさんに紹介して、その料理の由来など食習慣の説明しておりました。その後、お出でになったみなさん（約30人）と一緒にその二つの代表的なロシアの料

後に、20世紀にロシアと日本はいくつかの戦争をしていましたが、その原因の一つはお互いに相手をよく知らなかったからだということが言えるでしょう。だから、ロシアと日本の関係、文化、歴史などについて理解することが必要だと思います。それと、交流留学生の数が増えてきました。これは、素晴らしいことだと思います。私たちロシア人と日本人が相互の交流、理解、助け合いをより深め、大きいものにしていくと思います。

（アーリヤ・アレブチーナ）



振替用紙のメッセージから



◎先日はありがとうございました。子供達の笑顔は何物にも代え難いですね!! シュミヒナ先生の想いがずっと続きますように…。(長野県)

◎マリアちゃんに心からお悔やみ申し上げます。(宮城県)

◎わずかですがお役立て下さい。(東京都)

◎少しですが八郷町上映会(アレクセイ&ナージャ&ミニ写真展)の余剰金を送ります。(茨城県)

◎グランドゼロありがとうございますました。有効に利用させていただきました。(茨城県)

◎いつもグランドゼロをありがとうございます。(京都府)

◎JNMAちゃん有り難う。可愛いらしいカードともうれしうございました。いつも少々の会費しかお送りできませんが、何かのお役に立っていればうれしいです。(埼玉県)

◎タチヤーナ先生のご冥福を心よりお

祈りいたします。今回は、ゆつくりグランドゼロを読みました。もう一回読み返してみます…。(石川県)

◎神田香織講談「チエルノブイリの祈り」を福井県鯖江市にて開催され参加します。(福井県)

◎いつも少額で申し訳ありません。(大阪府)

◎18年に対し何を返せよう!

◎「グランドゼロ」いつもありがとうございます。(京都府)

◎いつもお世話になり、ありがとうございます。ずっと悲しい事を経験してきているのに、戦争はなくならないでしょう。民族、宗教を越えて、話し合いをしてほしい。(奈良県)

◎おそくなり申し訳ありません。封筒に送付期限が書いてあるので助かります。働きが祝されますように出来る限り共にありたいと思っています。(埼玉県)

◎昨年はたいへんお世話になりました。月日がたつのは早いものです。何のお役にもたててなくてすみません。今年もよろしく願います。(長野県)

◎少しですがお役に立てれば幸いです。(東京都)

◎少しですがお役立て下さい。(京都府)

◎「振込用紙のメッセージから」は、もっと厳選してもよいのではないのでしょうか。5ページを費やす必要があるかどうか。飽くまでも事務局へのメッセージなので…。(東京都)

★他の会員さんの声が楽しみで、まずこのページから読むというお便りもありますので、ページを増やさずに、なるべく多くのメッセージをお伝えするように工夫していきます。(事務局)

◎10ドリームズ8としておそくなりましたが03年度12月分として払い込みます。(奈良県)

◎昨年(2003)の夏にゴメリの病室で出会ったあの幼女達はもう帰宅できたかしら。(東京都)

◎いつもグランドゼロ発送ありがとうございます。これからもたくさんさんの「想い」を結んでゆきたいですね…。(茨城県)

◎未来に生きる小さな命のために。(長野県)

◎地球上のすべての子どもに平和を願って。(長野県)

◎ほんの少しですが、子供たちの笑顔につながりますように祈っています。(長野県)

◎いつもグランドゼロを楽しみに待っています。59号は初めから涙々で読みました。人との出会いは時に悲しみを遺す。その悲しみを埋めるかのように人の心が集まり、そこから悲しみが生かされてゆく…。そんな想いがしました。どのページも素晴らしいメッセージ、ありがとうございます。(長野県)

◎グランドゼロが届くと、普段忘れそうになる平和へのありがたみを思い出します。
(神奈川県)

◎幼子に幸せのくることを願っています。
(北海道)

◎心ばかりですがあちこち送るのでご笑納下さいませ。只今ちょっと血圧高くゆっくりしていますが皆様とあちらの皆様いかがお過ごしでしょうか。いつでも個々の心に平和が宿っていますことを心から祈り続けています。戦争の戦禍はすさまじく弱い者は心身の傷を受けるばかり、戦争のない時代へと心から祈り続けています。
(東京都)

◎昨年中に会費が送れなくてすみません。
(宮城県)

◎地道に支援された人が拘束されてしまうことが悲しいです。遅ればせながらクリスマスカードありがとうございます。長崎賞受賞おめでとうございます。ピースウォークに参加して1

年がたち永井先生の言葉を皆の前でアピールさせていたいただきました。

◎内容豊富な「グランドゼロ」ありがたく拝読させてもらっております。
(京都府)

◎少額で心苦しいのですが。(長野県)
◎シュミヒナ先生のこととはとても哀しいことです。今、生命のかけつぎということを思っています。微力ですが…。
(新潟県)

◎住所シールに一言あるのはとてもいいです。チエルノブイリ事故からもう18年なのですね。「忘れないでいたいチエルノブイリ」です。
(兵庫県)

◎ホンの気持ちですがお送りさせていただきます。
(埼玉県)

◎グランドゼロいつもありがとうございます。嬉しいことも悲しいこともありました。長い時をかけての皆様の頑張りにはんの少しの気持ちを送らせていただきます。
(千葉県)

◎タチヤーナ先生亡くなられたのですね、ご冥福をお祈りしています。

◎地球のどこにいても小さな生命を守りたいですね。
(石川県)

◎いつもありがとうございます。よろしく願います。
(愛知県)
◎この悲しみの深さ、言葉をなくします。タチヤーナ・シュミヒナお母さんに抱きしめられた子供達、大人達、その暖かさ、優しさ、しつかり残ってますよ。心からお疲れさまでした。

◎タチヤーナ先生のことをグランドゼロで、いつも読ませていただいて、本当に太陽のような方だなあと感じていました。先生のために…。
(広島県)

◎ご健闘を祈ります。
(東京都)
◎夫は2003年11月7日死去しました。最後まで皆様のご活躍をお祈りしておりました。
(兵庫県)

◎お役立てください。
(埼玉県)

◎鎌田先生ありがとうございます。どうぞご自愛なさって下さいませ。先生のご健勝をお祈り申し上げます。心よりありがとうございます。
(東京都)

◎チエルノブイリの事故から18年、何の罪もない赤ちゃんにまでその被害が及ぶ事の重大さを、あらためて官も民も肝に銘ずる必要があると痛感します。
(京都府)

◎4月25日朝日新聞広告で見ました。少しですがお役立て下さい。(兵庫県)

◎今後も少しばかりであります。応援させていただきます。(神奈川県)
◎いつも会報ありがとうございます。タチヤーナ先生の訃報にただ涙。最期まで子ども達のことを思い、生き抜いた姿を忘れないで生きていきたいと思いました。合掌。
(東京都)

◎私個人の調査研究によりますと、植物樹木には、放射能を吸収、消化？、代謝する性質があるようです。お試しあれ。
(山形県)

◎長崎賞おめでとうございます。天国

のタチヤーナ先生の生き方にも感動しています。夫が退職しました。その記念に。
(石川県)

◎朝日新聞で拝見しました。少しですがお役に立てて下さい。(千葉県)
◎遅くなつてすみません。よろしくお願います。
(長野県)

◎首都圏で活動の報告会を開いてほしい。
(神奈川県)

★2001年4月26日に、代々木オリピックセンターにおいて『JCF活動報告』を開催しました。また首都圏での報告会も企画したいと思います。

◎時折新聞でチエルノブイリの事を見て胸が痛みます。少数ですがお送りします。
(大阪府)

◎子供達の為にお役立て下さい。

◎信州の山深く新緑に吸い込まれ、「いわかがみ」や「二輪草」の小さい花々

にこいやされました。(京都府)

◎神田香織講師の「チエルノブイリの祈り」、若い消防士夫妻の話に胸をつかれました。
(福井県)

◎いつも「グランドゼロ」をお送り頂きありがとうございます。核の恐ろしさばかり、また皆様の地道な活動もわかります。わずかですが、その活動の一部にして下さい。
(東京都)

◎わずかですがお役立て下さい。

◎少額の寄付にグランドゼロ毎号送って頂いて申し訳ないくらいですが、忙しくて身の回りのちいちゃい事にいっぱいいっぱいになっている時にグランドゼロの表紙を見ただけで、針が戻るというか、…とても静かな気持ちになります。送って頂きありがとうございます。
(長野県)

10 年間に 10 の夢を実現しようと生まれたチェルノブイリ 10 ドリームズも今年は 9 回目を迎えました。

今年はベラルーシの医師を招きます。一人の医師を育てることは何人もの子どもの命に関わることでしょう…。また支援先のゴメリ州立病院小児血液病棟は、新しく設立された放射線医学人間環境センターに移転しました。新しいセンター内にも院内学級を作るための支援コースも設けました。白血病支援コースとともに応援をお願いいたします。

10ドリームズ 9 振込口座

A コース	医師の研修支援
B コース	小児白血病支援
C コース	院内学級サポート
郵便振替口座番号	00570-6-34568
加入者名	チェルノブイリ (10) ドリーム 9

10 ドリームズへの寄付はおいくらでも構いません。

応援してくださった方には、現地の病院の子どもたちからクリスマスカードが届きます。

また事務局に、本誌に同封したチラシがございます。

配布して下さる方、常時置いてくださる方を募っておりますので、ご連絡下さい。



J C F 会費振込口座

賛助会費	5,000 円
特別賛助会費	30,000 円
事務局ガンバレ会費	10,000 円
郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

* 会費・寄付の入金時には入金確認の礼状はがきを差し上げます。
はがき不要の方は振り込み用紙の通信欄でご連絡下さい。また領収書の必要な方もその旨お書き下さい。

チェルノブイリ 10 ドリームズ 9

わたしたちが、つないできたもの
それは子ども達の夢と未来



日本から私たちが支援に行くと入院中の子ども達は興味深げに寄ってくる。日本から葉が届いていることを知っている。日本とベラルーシの医師と一緒に自分達を診てくれていることも。
でも私たちにはまだ届けられない子ども達がいる。



ファスティチャ：出会い

ВСТРЕЧА



23年間連投のコラムニスト

前号のファスティチャは長崎までの遠出をしたので、今回は地元松本の会員さんを訪ねたいと思いました。『出会い』の言葉通り、面識のある方や、

繋がりのある方ではなく、振込用紙のお名前を通じてだけ知った方に（もしかしら断られるかもしれないのも覚悟で）お願いをしてみることにしました。JCF発足当初からの会員さんで、今も応援していて下さる松本在住の男性（会員さん訪問は女性の登場が多いので）という条件で、データベースを検索して、中野幹久様という方を選ばせていただきました。奥様からご帰宅の時間を伺って、お願いの電話をしました。

会員さん訪問の取材についてお話ししたところ、お返事はしばらく保留ということになりました。

「本当に私のことを調べて、電話されたわけではないのですね」と念をおされる口調が気になって、電話を切っ

た後でインターネットでお名前を検索させていただきました。

なんと中野さんは、『市民タイムス』（松本、大町市などの22市町村で発行されている、地域に密着した内容のタブロイド判日刊紙）の一面コラム『みすず野』を、23年間一人で書き続けた方だったのです。この『みすず野』は二冊の本にもなっていました。

「会員さんを訪ねて」の取材をお願いする方を選ぶ時に、上映会をされたとか、何かイベントに関わったとかの情報を頼りがちなので、「特別」な方をお訪ねしているような印象をもたれているのではないかと気になっていました。そこで振込用紙のお名前だけの情報を頼りにお願いしたら、かえって、かなりすごい方、しかも取材のプロに激突してしまっただけでした。

電話口で躊躇されていた口調から、きつと断られてしまうだろうと覚悟し



ていたのですが、訪問をお受け下さるという連絡をいただきました。

中野さんは、新聞の顔であるコラムを、1980年2月から2002年11月まで23年間、総数にして7000余編を毎日お一人で書き続けられ、同時に長く編集局長をされた方です。素人の私がどんな取材をしたらいいのかと前夜から緊張、当日は仏壇の母に「どうかきちんとお話が聞けますように」と、困った時の仏頼みをして出かけたのでした。市民タイムス社ロビーでお会いし

た中野さんは、穏やかな口調の物静かな方で、

「ささやかながらの寄付を出していることで、自分が出るということに、ためらいがあります。グランドゼロの寄付名簿も匿名でも思っているくらいです。資料を用意しましたから、これを読んでいただいて、そんなとりたててお話しするようなことはないですよ」

と早々とお話を終わりにされそうな雲行きです。あわてて会員さん訪問の趣旨など説明して、何とかお話を続けさせていただきました。

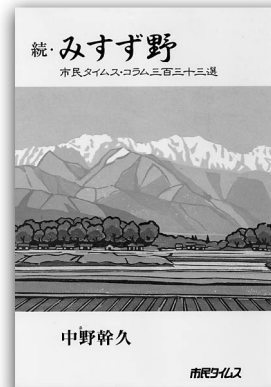
中野さんがJCFを応援して下さるようになったきっかけは、JCFの事務局が地元であり、タイムスの記者も取材をしたつながりから、中野さん個人も応援してくださるようになったそうです。

中野さんからプレゼントされた『みすず野』を開きながら、お話は2001年12月19日の記事の思い出になりました。

毎年、10ドリームズへの寄付者には現地の子どもがクリスマスカードを書いてくれます。前年のクリスマスカードが年を越してやっと届いたので、2001年の12月になると、今年は大丈夫かしらと事務局みんなが心配していました。ちょうどそんな時、市民タイムスのコラムに次のような文章が載りました。

異国の見知らぬ子どもから「メリークリスマス」のエアメールが届いた。線描や「ス・ノーヴィムゴードム（新年おめでとう）」の文字がかわいらしい▼日本チエルノブイリ連帯基金がベラルーシ・ゴメリ州立病院で治療を受けている子どもたちに書いてもらい、関係先に手配した。……▼旧ソ連ウクライナで86年4月

起きたチェルノブイリ原子力発電所事故の汚染は、ベラルーシにも及んだ。両国で400万人が被曝、子どもたちには甲状腺障害、小児白血病が多い。……▼最後まで運転していた3号炉が15日に閉鎖された。爆発した4号炉を覆ったコンクリートは「石棺」と呼ばれ、今世紀の象徴的な負の遺産とされているが、崩壊の危険がある。その対策は国の力ではできないという。ベラルーシの医療機関では放射線治療機が故障し、血液検査の試薬が少なく、との連絡がJCFに入った。その資金が今足りない。



あの時、事務局に電話でクリスマスカードのロシア語の訳の問い合わせをして、この記事を書いて下さったのは、中野さんだったのです。思わず「出会い」というこのコーナーのタイトルが頭をかすめます。

23年間毎日コラムを書き続けるのは大変です。心に燃えるものがないと書き続けていくことはできない。心血を注いで書いたコラムもなにか突発事件が起これば、そのことにふれた記事に書き直しを迫られることもあります。

それに私はコラムを書くことだけが仕事だったわけではなく、コラムは新聞作りのひとこまだったのです。集中してコラムを書いている時に他の用事が飛び込んでしまい、それまでの流れが失われることもあって、辛かったです。

難しい言葉を使った説教調の文章で

はなく、人に働きかけて、平明でも少しでも心を打って立ち止まってもらう文を書くことが、私が『みすず野』で目指したことです。専門的なことは大勢の読者のほうが詳しい人がいる、コラムを長いこと担当して、いかに自分がものを知らないかがわかりました。

中野さんは淡々とおっしゃいます。グランドゼロの記事を書くときは、「JCFを応援して下さる方」というある一定のイメージの読者を想定できますが、一般紙のような多様な読者を前にした時、中野さんはどんな読み手をイメージされるのでしょうか。

小学校高学年が読めるように、そして愛読者だった亡くなった母のような高齢者のことも念頭におきました。カチカチ語も使わないようにしました。

「言葉」へのこだわりについてのお話になると、熱の入る中野さんです。

23年間コラムを書き続けた中野さんのこの言葉は、さらりとおっしゃるだけに、とても迫力がありました。

編集局長をされた中野さんが、伝えることは難しいとおっしゃいます。

「一つの事象を取材するならまだしも、人を取材するのは難しい。相手のなかにどれだけとけこんで相手の持っているものを引き出すか。反面、活字は人を殺すとも言いますし……」

そんな言葉を終わりに下さった中野さんの訪問記事、冷や汗かきつつ書きました。

中野さん、つたない取材に丁寧にお答え下さってありがとうございます。JCFの活動を広く伝えていくことに、またお力を貸して下さい。

秘密の夢の実現を楽しみにしています。
(布山)

最近よく使われる「生きざま」という言葉はもともとはない言葉です。

「さま」と濁らないのは「〇〇様」とか、様子を表す「さま」ですね。「ざま」と濁るのは否定的で軽蔑的な意味合いを含み「死にざま」「ざまをみる」が代表的です。「死にざま」という言葉はありますが「生きざま」は無かったです。恐らく20年くらい前から言葉に凄味を出すために使われるようになり、ついに広辞苑にも4版から採用されました。でも私は使いたくないですね。最近使う「なににの目線で」という言葉もおかしいと思います。「目線」は映画やテレビ関係者が言い始めたようですが、普通の言葉では「視線」というべきでしょう。まあ言葉は生き物で変わっていくものですし、新聞が表現を変えてきてしまった面も多々ありますね。

言葉にもこだわって、多くの読者に迎えられる新聞を目指してきた中野さん、言葉についてのお話は静かに熱く続きます。

時間も迫ってきたので、これからの夢はとお聞きすると、やはり言葉を紡ぐこと、具体的には「秘密です」と、ちよつといたずらっぽく笑われます。お話の最後にJCFのこれからの活動へのメッセージをお願いしました。



よろず そ こつ どう ほん ぼ
萬粗忽堂本舗

店主 村石 保

その七

サントペテルブルクの
月とブランコとRさんの涙

本橋成一さんの写真展「Належда (ナジェーダ)」が(5月30日〜6月27日)開かれるという機会にも恵まれ、長年の夢でもあった白夜の都サントペテルブルクを訪れることになった。

写真展準備の助っ人(になったかどうかは定かでないが……)という、それなりの大義名分と建都三百一年目

の都にして、ドストエフスキーをはじめとする十九世紀ロシア文学の舞台を、そぞろ逍遙してみようではないかというところで、写真家で映画監督の本橋さんとそのお弟子さんの明石君、信州大学医学部の倉科教授とモスクワ在住の通訳ジーマと私たち夫婦という、いわば気の置けない六人衆による旅であった。

*

*

*

ヨーロッパに限らず、都市は大河の両岸にへばりつくように形成される。左岸と右岸では歴史も文化も住民の階層も違ってくる。河が流れ街ができ、広場ができる。広場はまた数多の歴史を育んでもきた。教会が建ち布教が行われた。物が売買され金持ちと貧乏人がうまれた。法律ができ裁判がひらかれた。そしてある日、広場から革命が蜂起された……。

サントペテルブルクもネバ河が街中を大蛇のごとく蛇行し、さらに大小の運河が縦横に街を編んでいる。夜の十一時を過ぎても、まだ青空が残っている。これではせつかくの月も存在が希薄である。

*

*

*

さて、写真展は、街中の大きな図書館が会場となった。

ベラルーシを舞台とした「ナージャの村」と「アレクセイと泉」のモノクロ写真をメインに、毎日新聞に連載されたカラー写真による「生命の旋律」を含めた百点の作品が、ロシア的威容を誇る図書館の割には大きすぎず、さりとして小さすぎもしない、程良い一室で展示されたことが、功を奏した。

ナージャやアレクセイたちとも久しぶりの再会であった。ずっと、自分の中で意識して見続けてきた作品群であったが、映画(フィルム)や写真集(印刷)とは、趣を異とする写真だけがもっている独自の臨場感に溢れていた。写真展は、言語では表現不可能な、いわば作品と空間のコラボレーションによって、「写真的記憶」の世界へ誘う装置でもある。

ナージャのブランコは、現代社会が見失ってしまった〈希望〉への永久運動である。アレクセイが汲み上げた泉の水は、ドストエフスキーの言う、一人の子どもの涙である。岩のごとく変形した農夫の手は、凍土を穿ち豊かなる(いのち)を収穫する歴史の鍬である。

*

*

*

写真展のオープニングセレモニーでは、DVDによる

「アレクセイと泉」が上映された。上映後、子どものように涙を流している女性がいいた。われわれの通訳や現地ガイドをしてくれた、日本人女性のRさんである。彼女はロシアの男性と結婚し、サントペテルブルク在住七年目になるという。

日本語学校の教師をしているRさんの第一印象は、「日本語のきれいな人」。日本では聴くことが希になった質実にして確かな日本語だった。帰国後、彼女から届いたメールによると、「皆さんとの心地よいテンポある会話が嬉しかったです。仕事柄、いつも分かりやすい日本語を心がけているせいで小学生日本語が身に付いていて、久しぶりにいい脳の刺激になりました」。

Rさんの「小学生日本語」が、心地良いことの所以である。彼女は、翌日もわれわれのために街案内を買って出てくれた。勤務先である日本語学校も見学させてもらった。とてもいい時間が流れた……。

別れ際、Rさんはわれわれ一人ひとりにチョコレートとブレゼントしてくれた。それが彼女の気持ちの表れだと思ったら、Rさんの言葉が、さらに胸の深奥にまで響いた。

ニュースクリップ

<国 内>

●伊方原発、1次冷却水漏れ

愛媛県と四国電力は、運転中の伊方原発3号機の原子炉補助建屋内で放射性物質を含む1次冷却水約1.6トンが漏れ、微量の放射性物質が外部に漏れたと発表した。(3月9日 毎日新聞)

●プルサーマル計画、福井県が了承

関西電力高浜原発3、4号機で、ウランとプルトニウムの混合酸化物(MOX)燃料を使う「プルサーマル計画」について、福井県は、関電による海外でのMOX燃料加工委託を了承する方針を固めた。99年から延期されていた関電のプルサーマル計画は、4年ぶりに動き出す見込みとなった。(3月13日 毎日新聞)

●浜岡原発2号機でもひび割れ

中部電力は、定期点検中の浜岡原発2号機で、シュラウド本体最下部のサポートリング溶接線付近でひび割れ4カ所が見つかったと発表した。同原発では1、3、4号機でもシュラウドにひび割れが見つかっており、3、4号機では補修せず運転を再開している。(3月22日 時事通信)

●再処理工場の健全性に問題なし

青森県六ヶ所村にある日本原燃の使用済み核燃料再処理工場で燃料貯蔵プールにずさんな溶接が見つかった問題で、同社が提出した施設の総点検結果について経済産業省原子力安全・保安院は「施設の健全性は特に問題ない」などとする最終評価をまとめ、総合資源エネルギー調査会の検討会に報告した。(3月30日 共同通信)

●原発稼働率がまた低下

2003年度の国内の商業用原発52基の設備利用率(稼働率)は前年度比13.7ポイント減の59.7%で、過去24年間で最低だったことが経済産業省原子力安全・保安院のまとめで分かった。(4月9日 共同通信)

●放射線過剰照射防止徹底

国立弘前病院や山形市立病院済生館などで、がん患者らへの放射線過剰照射事故が相次いだことを受け、厚生労働省は、放射線装置を使っている全国の医療機関に防止策を徹底するよう求める緊急の通知を出した。(4月10日 共同通信)

●サマワの米兵に劣化ウラン

紛争地域での劣化ウラン弾による被害を調査している米国やカナダを拠点とする「ウラニウム医療研究センター」のアサフ・ドラコビッチ博士が東京都内で記者会見し、自衛隊が派遣されているイラク・サマワから帰還した米兵から劣化ウランが検出されたと発表した。博士は「体内に入った劣化ウランは白血病やがんを引き起こす恐れがある」と危険性を訴えている。

(4月12日 共同通信)

●浜岡原発停止求め全国署名活動

反原発の市民グループなどで作る「原発震災を防ぐ全国署名連絡会」は、マグニチュード8クラスの東海地震が起きる前に中部電力浜岡原発を止めるため、100万人を目標に全国署名を始めたと発表した。(4月27日 毎日新聞)

●放射能一定以下なら産廃に

経済産業省原子力安全・保安院は、廃炉となった原子炉の解体に伴って大量に出るコンクリートや金属などの廃棄物について、放射能レベルが一定以下なら再利用や産業廃棄物としての処分が可能とする基準の導入を決めた。

(5月3日 共同通信)

●大飯原発、原子炉上ぶたの配管で水漏れ

福井県原子力安全対策課は、定期検査中の関西電力大飯原発3号機で、原子炉容器の上ぶたの配管に、1次冷却水の漏えいを示すホウ酸が付着しているのが見つかったと発表した。原子炉容器の上ぶたからの冷却水漏れは国内初。

(5月6日 共同通信)

●日本の原発被曝総量最多

日本の原発で保守点検に従事する作業員の放射線被曝量は、原発を持つ主要な国の中でも最も多い状態が続いており、経済産業省原子力安全・保安院は、他国の保守点検状況などを分析し、作業の改善点を探る調査に乗り出した。

(5月7日 共同通信)

●原発の増設目標、下方修正

経済産業省は、原発の増設目標を2030年度までで10基程度とする計画をまとめた。地元住民の反対で原発の建設が遅れていることや、長期的なエネルギー需要が頭打ちとなる見通しのため、2010年度までで9～12基だった従来計画を下方修正する。

(5月14日 時事通信)

●使用済み核燃料搬入が再開

青森県六ヶ所村にある日本原燃の核燃料再処理工場への使用済み核燃料搬入が約1年7カ月ぶりに再開、東京電力福島第二原発から出た使用済み燃料約46トンを積んだ輸送船が、むつ小川原港に到着した。搬入は、施設の不正溶接問題で2002年11月に中断されていた。(6月3日 共同通信)

<海 外>

●IAEA、イラン核非難決議採択

国際原子力機関(IAEA)の定例理事会(35カ国)は、イランの未申告の核関連実験などに「深刻な懸念」を表明、6月までに核計画の全容開示などを求める非難決議案を採択した。

(3月13日 共同通信)

●イラク核施設で機器大量流出

IAEAの保障措置(検査)協定下にあるイラクの核施設から、多くの機器や放射性廃棄物などが運び去られ、民生用にも核兵器開発用にも使える「両用品」が国外に流出している可能性もあることが明らかになった。米主導の占領軍の管理がずさんなためと見られる。(4月15日 朝日新聞)

●アボリジニに開発拒否権

オーストラリア北部の国立公園内にあるウラン鉱山の開発中止を求めてきた先住民アボリジニと鉱山会社との間で、アボリジニ側の同意なしには開発しないとの協定が成立した。

(4月23日 共同通信)

●米、小型核解禁に問題なし

米政府が、爆発力5キロトン以下の小型核の研究・開発を禁じた「ファース・スプラット条項」について、昨年決まった条項の廃止は米国の大量破壊兵器の不拡散政策に悪影響を与えず、ロシアや中国との核軍拡競争を招く要因にもならないとの報告書をまとめ、議会に送付していたことが分かった。

(4月25日 共同通信)

●チェルノブイリ事故で320万人被曝

史上最悪の放射能流出惨事となった1986年4月26日のウクライナ・チェルノブイリ原発事故で、ウクライナ保健省が最近、事故による被曝者を320万人とする調査資料をまとめていたことが分かった。

(4月26日 時事通信)

●放射能値通常の100倍

ロシア紙イズベスチヤは、ウクライナ・チェルノブイリ原発の原子炉周辺で、現在も通常の100倍に上る放射能が検出されていると伝えた。事故を起こした4号炉は「石棺」と呼ばれる防護施設で封印されているが、石棺から70メートル地点で計測器の数値は上限の毎時999マイクロレントゲンを振り切り、1000マイクロレントゲン以上を示したという。

(4月26日 時事通信)

●米、臨界前核実験8カ月ぶり実施

米エネルギー省国家核安全保障局は、通算21回目の臨界前核実験をネバダ州の地下核実験場で実施したと発表した。前回の昨年9月19日以来約8カ月ぶり、ブッシュ政権下では8回目。

(5月26日 毎日新聞)

●米ロ、高濃縮ウラン処理で協定

ロシア訪問中のエブラハム米エネルギー長官は、ルミャンツェフ・ロシア原子力局長官との間で、旧ソ連・東欧圏17カ国にある20の実験用原子炉に保管されている兵器級の高濃縮ウランをロシアで再処理することをうたった協力協定に調印した。

(5月27日 時事通信)

●核物質輸出の規制強化へ

核関連物質・技術の輸出規制策をめぐりスウェーデンのイエーテボリで開かれていた多国間組織「原子力供給国グループ(NSG)」(日本、米国など40カ国)の総会は、中国など4カ国の新規加盟を承認、プルトニウムやウラン濃縮機器など原子力専用品の輸出管理強化などを決定した。

(5月28日 共同通信)

こんにちは！



命に手をたいて、歓声を叫んだ彼らが立っている木は下に歩いている人により動かされました。この人々が近づくとに合せて特別に選ばれた子供達は歌を歌い始めました。子供達は熱心に大きな声を出したのに風と人ごみの音にかき消されて、子供達は本当にかわいそうでした。

次に私達が向かったのは諏訪大社でした。途中で日本の伝統的な踊りや曲芸師の小演奏をみました。コミカルな演奏もみました。しかし、私達は少し分かりませんでした。日本の神社へのお参りは初めての体験でした。帰ろうとした時に私達はかつて見たことがない、巨大なたいこを見つめました。そばに立っていたやさしいおじさんに「打つても良い」といわれたから、もちろんその機会を喜んで、叩きました。

残念ながら、神木の引き立て（建御柱は翌日に行われるので見る事が



右 オレーシャ・中央 アーリア

できませんでした。しかし、写真を沢山撮って、ビデオの撮影をして、さらに神谷さんとかわいい諏訪大社のおみやげを買ったので、日本について一杯楽しい思い出を作ることができました。

（オレーシャ・フラパータヤ）

Здравствуйте!

御柱祭



4月の月末から5月の中旬に長野県は全国からの注目を浴びました。日本の様々な所からの観光客が長野県を訪れました。テレビで放送しているルポルタージュや新聞に載せている記事は御柱祭についてでした。

7年に一回だけ行われていて、戦争の時でもこのイベントだけは禁止されていないという日本の特別な祭です。その理由で日本のみではなく、私達の母国であるロシアにも御柱祭についてのルポルタージュはテレビで放送されたと親類や友達から何回も聞きました。

ですから、交換留学生である私達は、神谷さだ子さん（JCF事務局長）から、この祭を見に行こうと、誘って貰った時は非常にうれしかったです。

5月2日に三人で松本駅から上諏訪へ出発しました。祭の主要なイベント「木落とし」は一ヶ月前に終わっているのに、現場は人で一杯でした。日

本人だけではなく、私達のような外国人も大勢いました。

皆が見に来たのは里曳きさとびでした。たくさんの人々が一緒に大きな木を村に沿ってひっぱって行くということです。

日本にもう半年以上いるのだけど、そのような輝かしいイベントに参加することは初めてでした。見るだけでなく、体験することができました。とても大きい木の幹に数え切れないほどのロープが結わえ付けられています。一般の人々はそのロープを引っ張って、木を動かしました。私達もロープを一つずつ貰って、しばらくの間引っ張りました。本当に日本の文化自体にうまく触れたという感じでした。

引っ張られた木には巨大なまた（メドデコ）が付けられていました。私達はこのふたまたに登った人の勇氣に本気で驚きました。ただふたまたに立つだけではありませんでした。一生懸

こんにちは！



Здравствуйте!

雪とパイナップル

鎌田 實

「その子どものおかあさんは、今どう思っているか、ずっと、気になっていた。悲しみがあれば、その悲しみを聞いてあげたい。グチでもうらみでもいいと思った。会って声をかけてあげたいと、思った」
本文より。

文：鎌田実
画：唐仁原教久
発行：集英社
定価：1500 円 + 税

97年の2月だった。ベラルーシの児童に対して初めて行われた末梢血幹細胞移植という白血病治療。ベラルーシと日本の医師、看護師、衛生検査技師、メディカル・エンジニア、みんなで一人の少年の命を救うために検討が重ねられた。少年の母は「この子にとって、最後のチャンスです」と日本の医師たちを信頼してくれた。無事に終わった時のエレナお母さんの安堵の涙は忘れられない。そばで父のバロージャさんもほっとされていた。

しかし、きびしい事だった。何回かの緊急事態を皆の協力で乗り越えていった少年アンドレイは2000年7月に、天国に旅立っていった。『亡くなった』という報告をすると、鎌田先生は電話でこう言われた。「うまくいった時はいい。そうでない時、残された家族に会って話すことが大切なんだ」。病氣と闘っている時のアンドレイ。小康を得て、外来通院をしているときのアンドレイ。いつもそばに母エレナさんがいた。

2002年春、アンドレイの家族を訪ねることになった。暖かく迎えられた居間には、まだアンドレイの思い出の品々がたくさんあった。鎌田先生の「残された家族とお話をしたい」という意味がわかったような気がした。

お母さん、お父さん、妹のマリアの気持ちも伝わってきた。

そこで、思いがけない出来事がお母さんの口から語られた…。

「雪とパイナップル」

イラク戦争開戦の日に、ぜひ伝えたいことだった、と鎌田先生は言う。

「そこにいるあなたが、苦しんでいる。私は、何をしてあげられるだろう。」弥生さんは、アンドレイのささやかな願いをくみとってくれた。

エレナお母さんの胸に刻まれていた厳冬の日のあたたかなおもいやり。日本の看護師さんが、アンドレイと彼の家族、そして私たちをつないでくれた。そして、この本を読んでくださるたくさんの方たちとをつないでいく。

治療中のアンドレイのさまざまな表情が思い出される。アンドレイ、ありがとう…。

戦争なんて、もうやめて

佐藤真紀



戦争なんて、もうやめて
著者：佐藤真紀 JVC
発行：大月書店
定価：1400 円＋税

子どもたちの絵は、描いた子どもと同じように個性を持っています。佐藤さんが、図書館に遊びに来た子どもたちの落書きがいきいきとして、できなことに驚き、目を留めたことから、子どもたちの絵の交流が始まりました。戦禍の中で自画像を描きながら、子どもたちは何を見つめたのでしょうか。

Book

ぼくの見た戦争 2003 年イラク

高橋邦典



ぼくの見た戦争
著者：高橋邦典
発行：ポプラ社
定価：1300 円＋税

アメリカ海兵隊と行動を共にしながら撮った写真は、正直つらかった。アメリカ軍に従軍するということだけでもそれは違うのではないかと拒否したくなる。しかし、現実から目をそらさないこと、そしてあとがきに高橋さんの逡巡が読みとれる。高橋さんは、同じ空の下、同じ人間同士がなぜ戦争をしなければならなののか、なぜ殺し合わなければならなののか、と問うている。

Book

空爆と「復興」

中村哲



空爆と「復興」
著者：中村哲
ベシヤワール会編
発行：石風社
定価：1800 円＋税

対テロアフガン侵略が始まったとき以来、私たちは、中村哲さんからの報告に耳を傾けている。国家・政治という枠組みに絡め取られない民衆と共にある中村さんが語るアフガン情勢こそ真実の姿だろうと思っっている。医療から井戸掘りへ、そして食料支援へとシフトする必然性が読みとれる。ベシヤワール会の活動は、政府の人道支援と対局にあり、日本が期待される支援とは何か、私たちに示している。

Book

ボクの体験したチェルノブイリ

ティート・タルラップ



ボクの体験したチェルノブイリ
著者：T.タルラップ
発行：エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金
〒167-0053 東京都杉並区西荻南 1-19-2
Tel:03-3334-9770
実費：600 円（送料一冊 240 円 10 冊以上無料）

チェルノブイリ事故処理のために突然招集され、被災地に送り込まれたリクヴィダートル（事故処理参加者）のエストニア青年の手記。
*この書籍は自費出版です。購読希望の方は「エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金」までご連絡下さい。

Book

アレクセイと泉のはなし

本橋成一



アレクセイと泉のはなし
写真と文：本橋成一
発行：アリス館
定価：1300 円＋税

いのちは、みんなつながっている。今、この地球にあるいのちは、33 億年の時をかけてつながってきました。ヒトや馬や犬、ネズミ、ミミズ、花や草だってそうです。…この地球では、人間だけの都合では決して生きていけません。…（あとがきより）

Book

不思議の国ベラルーシ

服部倫卓



不思議の国ベラルーシ
著者：服部倫卓
発行：岩波書店
定価：3000 円＋税

「あなたは何人か？」と問われて、ベラルーシでは「トウテイシャ（この土地の者）」と答える、というくどりが面白い。JCF は 13 年間、ベラルーシへの支援交流活動を続けてきたが、こういう言葉は知らなかった。出会わなかったのは、私たちが日本人とベラルーシ人とお互いを考えていないからだろうとこの書を読んで思い至った。

Book



第 60 号

発行日 2004 年 6 月 26 日

発行人 鎌田 實

発行所
日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原浩
イラスト 武内裕子
重岡朱
表紙デザイン 酒井隆志
スタッフ 神谷さだ子
布山みな子
重岡朱
協力 佐内裕之
風樹 光

■編集後記

宮尾さんの連載「ことばのみなもと」は推敲を重ね、その過程は彫刻家の仕事を見るようだった。「会員さん訪問」でお訪ねした中野さんも、言葉に深いこだわりと敬意を持つ方、期せずして続けてお二人の「言葉」へのこだわりが、自分を省みる。「夏椿一花一花の風白し 言葉尽くせば汚れゆくかも（竹内由枝）」伝えることのもどかしさ…。それでも言葉に踏みとどまり、それを手渡したいと願おう。例え一陣の風のきらめき、一瞬の抱擁に敵わないとしても。

(布山)

< 4 月 >

■事務局日誌■

- 19 日 ベラルーシ大使、JCF・松本市長・信州大学表敬訪問
- 20 日 NPO 学習会
- 21 日 アルプスフロント懇話会
- 22 日 徳島日赤病院にて招聘事業話し合い
- 24 日 4.26 メモリアルイベント「ベラルーシの食卓」(M ウィング)
- 28 日 クリーンルームフィルター搬入
- 7,14,28 日：ミンスク・小児血液がんセンターとの衛星通信 (信州大学)
- 2,9,16,23,30 日：ロシア語講座

< 5 月 >

- 8 日 会計監査
JCF セミナー「イラクの医療と白血病」(M ウィング)
理事会
- 11 日 映画「ヒバクシャ」上映準備会
NPO 学習会
- 13 日 アルプスフロント懇話会
- 14 日 スタディツアー事前説明会
- 25 日 薬品納入 (環境センターへの支援)
- 27 日 アルプスフロント懇話会
- 28 日 スタディツアー出発
- 12,19,26 日：ミンスク・小児血液がんセンターとの衛星通信 (信州大学)
- 7,14,21 日：ロシア語講座

< 6 月 >

- 4 日 スタディツアー帰国
- 8 日 映画「ヒバクシャ」上映準備会
- 9 日 イラク・バスラの小児科医師、ジャンン先生との懇話会
- 13 日 映画「ヒバクシャ」上映事前学習会・「劣化ウラン弾の嵐」ビデオ上映 (M ウィング)
- 19 日 ジャンン先生との懇話会
医療機器、名古屋港出発
- 24 日 アルプスフロント懇話会
- 28 日 日本 NGO 支援セミナー (東京・神田、JICA)
- 29 日 「ぼくの見た戦争」写真展準備会
- 9,16,23,30 日：ミンスク・小児血液がんセンターとの衛星通信 (信州大学)
- 25 日：ロシア語講座

J C F / 日本チェルノブイリ連帯基金

●本部 〒390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263- 46- 4218 FAX 0263- 46- 6229
E-mail jcf@jca.apc.org
Website http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京 〒164-0003
東京都中野区東中野 4-4-1 ポレポレタイムス社気付
TEL03- 3227- 1405 FAX03- 3227-1406
●京都 〒607-8405
京都府京都市山科区御陵田山町 13-3
TEL075- 591- 7772

まなざしの向こう側へ 須田治追悼集編集委員会



まなざしの向こう側へ
著者：須田治追悼集編集委員会
発行：オフィスエム
定価：1429 円＋税

昨年3月、突然亡くなられたフリージャーナリスト須田治さんの友人たちからの送る言葉が綴られている。多岐にわたる方々の思いから、逆に須田さんの人となり浮かび上がってくる書である。「余白に記す」では、ジャーナリストとしての須田さんの真髓に出会い、10年前に湾岸戦争勃発時に須田さんの記された原稿が、今も現況を言い得ていることに打たれる。

Book

ひとりひとりの人 大西暢夫



ひとりひとりの人
著者：大西暢夫
発行：精神看護出版
定価：1890 円＋税

鉄格子のあるこわい病院。作者である写真家の大西暢夫さんは、この仕事をするまで精神病院に偏見を持っていたという。そんな書き出しで始まるこの写真絵本は大西さんの目線に導かれて、病院に暮らしている皆さんの個性豊かなひとと出会うことができる。

Book

生命の旋律 本橋成一



生命の旋律
著者：本橋成一
発行：毎日新聞社
定価：2800 円＋税

豊かさってなんだろう。人が生きるってどういうことだろう。新世紀に旅に出た本橋成一が撮る人間の生き様集。
「生きる知恵が、消えてしまわないうちに」——坂本龍一——

Book